

大阪学院大学

国際学論集

第32巻第1・2号 2021年12月

論 説

マリア皇太后日記（1914－1918）について
..... 広野 好彦—— 1

ケネス・G・B・デュワーとジュトランド論争(2)
..... 山口 悟—— 43

会員業績..... 79

大阪学院大学国際学学会

マリア皇太后日記（1914－1918）について

広 野 好 彦

The Diaries of Maria Feodorovna (1914-1918)

HIRONO YOSHIHIKO

ABSTRACT

Maria Feodorovna was the wife of Tsar Alexander III and the mother of Tsar Nicholas II. Her diaries were published as “Married to the Tsar. The Diary of Alexander III's Wife”, which contains entries from 1914 to 1918. The title of this work seems a little strange since Alexander III was already gone by this time, and the reign of Nicholas II had begun. However, it was a turbulent period in Russia, namely the First World War, the fall of the Romanov dynasty, and subsequently the socialist revolution.

This article mainly relies on them to describe a history from the perspective of Empress Maria. These diaries contain mainly descriptions of her daily life, her active work as President of the Red Cross, and her life in captivity after the revolution, and not much of political content. Her only active political role during this period was to persuade Nicholas II not to accept the post of Supreme Commander of the Russian Armed Forces at the time when the war situation was unfavorable for Russia. She feared that this decision would not only not be in the best interest of Russia or the Imperial family, but would also be seen as an initiative of Gregory Rasputin. However, her attempts to persuade him failed.

In contrast, contemporaries had high expectations for Empress Maria to play a political role. For example, she was expected to persuade Nicholas II to stop the political intervention of Empress Alexandra and Gregory Rasputin

and to organize a government that would gain the confidence of the Duma. It is true that Empress Maria also felt bitter about the political intervention of Empress Alexandra and Rasputin. She was also hoping that the high-ranking nobles would remonstrate with Nicholas. However, she was reluctant to engage in such activities. Perhaps she felt that she had no influence and did not want her son to suffer.

※はじめに

マリア・フョードロヴナ（Мария Федоровна）は、ロシア皇帝アレクサンドル3世の皇后であり、ニコライ2世の母である¹⁾。彼女の日記が『皇帝に嫁して。アレクサンドラ3世の妻、マリア・フョードロヴナロヴナの日記』として公刊されている²⁾。公刊された日記では、1914年2月9日から1918年12月31日まで断続的に記述がなされている。欠落している日付の記述がそもそも初めからなかったのか、何らかの理由で失われたのかについては、基本的には何も語られていない。そもそも日記のテキストに関する情報がない。例えば、日記は全文ロシア語で書かれているが、デンマーク語などからの翻訳である可能性がある³⁾。さらに書名がちぐはぐなのはいただけない。公刊されている日記の時期において、すでにアレクサンドル3世は亡くなり、息子のニコライ2世の治世になっているからである。

それはともかく、この1914年から1918年という時期には非常に興味をひかれる。第一次世界大戦からロシア革命に至る期間に当たっているからで

-
- 1) マリア・フョードロヴナはデンマーク出身である。すなわち後に国王となるクリスチャン9世の次女、ダグマル王女として生まれた（1847年）。ちなみに彼女は6人兄弟であり、その中において、兄がデンマーク国王フレゼリク8世、同じく兄ヴィルヘルムがギリシャ国王ゲオルギオス1世、姉アレクサンドラはイギリス国王エドワード7世王妃、妹テューラはハノーファー王太子エルンスト・アウグスト2世妃、末弟ヴァルデマーはデンマーク王子である。
 - 2) Мария Федоровна, Замуж за императора. Дневники жена Александра III, Москва, 2017. 日記の日付は露暦であり、西暦が並置されている。日記引用文中の〔 〕の内部は著者注釈である。
 - 3) 皇太后がデンマークで亡命者としての余生を送っていた1925年1月、デンマーク外務省は、とあるロシア人実業家が、皇太后の1916年の日記を持っていると主張しているのを知った。その日記は「完璧とは言えないデンマーク語でつぶられ、ロシア風の日付と祝日が用いられていた」。駐ソヴィエトのデンマーク外交官は、それを本物と判断した。皇太后の弟、デンマーク王子ヴァルデマーがその全文を読んだが、その内容は、ほとんどが家族、天候、日常的なことの記述で、ほんの10ページ程度がロシアの政治にかかわることであったとされる。ついであるが、結局のところ、この取引は成立しなかったという。Coryne Hall, *Little Mother of Russia. A Biography of the Empress Marie Feodorovna*, London, 1999, p.347.
ちなみに、公刊されている日記の1916年分は、まさにこのようなものである。

ある。無味乾燥なニコライ 2 世の日記を補うためにも重要であるかもしれない。

ただし、その日記が皇帝日記の補完材料となるかもしれないということは、マリア皇太后がニコライ 2 世に大きな影響を与えたという意味ではない。マリア皇太后とニコライ 2 世は、両者の関係が悪いわけではない。マリア皇太后はずっと息子のことを思い続けていたのであるが、種々の事情のために両者は隔絶していたからである。それゆえに、皇太后の日記から窺えるのは、当たり前のことではあるが、マリア皇太后の視点から見た当時のロシアの状況ということになる。もちろん日記はあくまでもマリア皇太后の私的なものであり、そこから当時のパブリックな世界を垣間見ようとするのは限界がある。そこに現れるのは例えば彼女が心配している家庭の問題、あるいは皇太后の恩顧をもとめてくる人々、彼女が熱心におこなった赤十字の活動、革命の混乱の中における拘束された日常生活などである。しかしながら、マリア皇太后は人間的には感情を隠さないタイプであり、それゆえに日記の記述も奔放でその意味でそれ自体興味を引き付けられるものではある。

以下、年代順に皇太后日記を読み解いていく。なおこの小論では基本的に露暦が用いられている。

* 第一次世界大戦の勃発

1914年 5 月 5 日から 7 月 19 日まで、マリア皇太后はイギリスに滞在している。公式訪問ではなく、実姉のアレクサンドラ王太后を尋ねたものである。日記を見ると、オペラの演目が並んでいる。「ボリス・ゴドノフ（5 月 19 日）」、「ラ・ボエーム（5 月 13 日）」、「マダム・バタフライ（6 月 6 日）」、「フランチェスカ・ダ・ダリミニ（7 月 9 日）」、「アイーダ（7 月 15 日）」など。このように遊興に満ちた日々の記録の中に次のような記載が出てくるのがきわめて象徴的である。

「6 月 15/28 日 お茶を飲んでいるとき、恐ろしい知らせが来た。ボスニアでフランツ・フェルディナンド公爵と彼の妻が殺害された。何とひど

いこと！神の御加護を得て、死ぬとき彼らは一緒であった。…」

「6月30日／7月13日 …8時に帰宅。すべての夕刊は、ラスプーチン暗殺の試みのニュースであふれていた。しかし彼は死なず、とある女性のために負傷した。」

前者は言うまでもなくオーストリアの皇位継承者殺害に関するニュースであり、ロシアを含め欧州の国家を大戦へと向かわせる直接のきっかけとなった。後者は、当時首都から追放され故郷のポクロフスコエ村にいたラスプーチン（Распутин, Григорий Ефимович）に対する暗殺未遂事件である。ラスプーチンは自宅付近で、ヒオニア・グセヴァヤ（Гусева, Хиония Кузьминична）に短刀で腹部を刺された。瀕死の重傷を負ったが死はまぬかれた。犯行の原因は、彼女の友達に対してあるまじき行為をおこなったラスプーチンへの報復であるという。この悪評高い被害者はロシア皇室に取り入り、その名誉を汚し、ロシアの国内的混乱の一因になる。そして大戦とラスプーチンは結合してロシア革命へと至る。

このような中、駐英露大使ベンケンドルフ（Бенкендорф, Александр Константинович）は皇太后に対して帰国を勧告する。

「7月11／24日 ジーナ〔ジナイダ・ゲオルギエヴナ・メングデン、皇太后のお付き〕とともに散歩に出た。セントジュームズ公園に行った。強風。そこでベンケンドルフに会った。オーストリアとセルビアにおける状況に関して、非常に不安な知らせが届く。彼は、私は直ぐに発つ必要があると考えている。当地においても状況はなべて悪い。」

「7月16／29日 迫りくる戦争の恐ろしい知らせがひどく不安にするので、家にとどまらざるを得ない。…7時にベンケンドルフが現れる。彼は私に去ることを求める。しかもできるだけ早く。」

ただ皇太后には退去にあたり考慮すべき家庭の問題があった。息子ミハイル・アレクサンドロヴィチ（Михайл Александрович）のことである。彼は1912年10月、ウィーンにおいて、2度の離婚歴のあるナタリア（Шереметьевская, Наталия Сергеевна）と貴賤結婚を秘密裏に強行していた。そのためにニコライ2世の怒りをかい、ミハイルはロシア帰国を禁じられ、公職勤務からの解職、あらゆる称号はく奪、資産に対しては保護

が設定されるという状態であった。この時期、ミハイルは家族を連れて、ロンドンに来ていたのであった。

「7月17／30日 12時にミーシャ〔ミハイル・アレクサンドロヴィチ〕が来た。私たちは少し散歩をした。私は彼に対して、まさに今、この重大な瞬間に私と一緒に帰宅することを懇願した。彼にとっては今がもっともよい決断であろう。遺憾ながら、いかなる結果も私は得られなかった。」

皇太后は帰国を促されているのに乗じてミハイルをも帰国させようと計画するが、当のミハイルに拒否される。ただし、断固拒否というのではなく、急な話のために決断がつかなかったというのが実情であろう。

7月19日、皇太后はイギリスを發ち、フランスとドイツ経由で帰国する予定であった。しかしベルリンで、ドイツ通過を拒否される。独露間で宣戦布告がなされたからである。ドイツ嫌いの皇太后は次のように記述している。

「7月20日／8月2日 フランスでは至るところで『ロシア万歳!』の叫び声で迎えられた。動員は全力でおこなわれていた。ドイツでは、私たちがベルリンの近郊に到着するまで、何も気が付かれなかった。ベルリン近郊では通りの人々が憎しみを発散させていた。私たちがベルリンに入ったとき（いやらしい場所である）、列車にセルビア人が現れ、宣戦布告されたこと、また私がドイツ国境を横切ることは許されないことが知らされた。」

皇太后はやむなく、デンマーク、スウェーデン、フィンランド経由で、7月27日にペテルゴーフに到着している。ちなみに7月21日、皇太后がまだデンマークにいた時に、アレクサンドラ王太后からイギリスが連合国側に立って参戦するという電報を受け取り、「何と大きな喜び」と叫び、周囲のものと抱き合った。他方、ミハイルは8月11日に帰国した。皇太后の計らいでニコライ2世と再会する。

「8月11／24日 ひどい興奮。本日、私のミーシャを待っていた。…お茶のために帰宅。そこにはまたニッキー〔ニコライ2世〕と2人の小さな娘がいた。かくして、ニッキーとミーシャは、ここ私のところで初めて会うことになった。彼らのこの再会は私にはとても感動的であった。ミー

シャは泣き出した。しかしすぐに彼ら両者は感情を自己の中で抑制し、それについては言及しなかった。」

こののち、ニコライ 2 世はミハイル大公を許し、彼の地位などを回復し、ミハイルは健康の許す限り軍務につく。彼の夫人には貴族の称号があたえられたが、皇族の集まりに加わることは許されなかった。

※大戦における銃後の活動

第一次世界大戦下のロシアでは、以前の戦争と同様に、皇族や貴族の女性も銃後で種々の形式で戦争を支えていた。皇太后の次女オリガ・アレクサンドロヴナ（Ольга Александровна）は看護師として前線に向かうことを志願する。皇太后はオリガの行動を理解すると同時に不安を覚えている。皇太后はオリガを自分の手元に留めておきたかったと思われる。

「7月28日／8月10日 私のオリガが言った。数日後彼女は福音部隊とともに、看護師として前線に向かうと。これは私には理解できた。しかしそれとともにこの考えは私を脅かした。」

「8月2／15日 私の愛するベイビー・オリガとの別れという悲しい瞬間が到来した。彼女は福音部隊とともに発つ。何と悲しいことであろうか！しかし、私たちの高貴で英雄的な兵士の世話をするという大きな願いに私は共感する。」

皇太后の銃後の貢献に関しては、何よりもロシア赤十字の総裁としての仕事があった。日記には、これに関係して、連日のように記載されている。例えば、前線に向かう部隊に対する引見。病院における負傷者の見舞い。自らの銃後救援組織（病院列車や倉庫）の管理などである。赤十字の代表として皇太后はウラジミール・スホムリノフ（Сухомлинов, Владимир Александрович）陸相に対して陸軍の欠けるところを赤十字が代替するとの提言すら行っている。

「8月14／27日 午前中ずっと客の応接。最初はスホムリノフ陸相。私たちの赤十字派遣隊が前線に向かうことが許されていないが、軍には実際のところ負傷者サービスが何もないことを彼に知らせた。」

戦争に関する厳しい現実も日記に反映され、ロシアにとってはかばかしくない戦果が記される。

「8月19日／9月31日 前線からの厳しい知らせ。東プロシアで恐るべき敗北を被った。3人の将軍が死亡。その中には私の愛しいサムソノフがいる！何と恐るべきこと！…私は完全な絶望状態にある！」

上記はいわゆるタンネンベルク会戦におけるロシアの敗北である。第2軍司令官アレクサンドル・サムソノフ（Самсонов, Александр Васильевич）将軍死去の報に皇太后は絶望状態である。さらには戦争の被害が皇太后の身近なものに及ぶ。1914年8月、東プロシアにおいて、皇太后が親しく交際していたオレグ・コンスタンチノヴィチ（Олег Константинович）大公が、瀕死の傷を負った。その報を聞きつけて、両親が前線へと赴く様子が記されている。

「9月28日／10月11日 かわいそうなオレグは重傷。コースチャ〔コンスタンティン・コンスタンティノヴィチ〕とマヴラ〔エリザヴェータ・マヴリキエヴナ〕は、ヴィルナの彼のところに行った。」

「9月29日／10月12日 昨夜かわいそうで愛らしいオレグが亡くなった。彼はそれでも、不幸な両親に会うことができ、聖職者のもとで告解することができた。何と恐るべき悲しみ！」

また日記には赤十字総裁としての皇太后が尽力した、交戦国の看護師による捕虜収容所相互視察の取り組みに関する記述がある。例えば、中立国のデンマーク赤十字関係者が、ドイツ赤十字関係者を伴い、シベリアの捕虜収容所を視察した帰途に皇太后を表敬訪問した記述がある。ここには皇太后のドイツ嫌いがおっている。

「1915年1月2／15日 正餐の後でデンマークの紳士メイエルとムウウスに会った。彼らはシベリアに行って来た。そしてドイツの婦人と会った。ムウウスは感じがよく、愛想がよい老人。彼が体験したすべてのことを語った。捕虜に関しては人道的に扱われているが、食事が不十分であると考えていた。この後私はドイツの婦人ケッセ・スタクールとパソフを引見した。しかしこれは私にとっては非常に不愉快であった。フランス語で話がおこなわれた。すべては十分素晴らしくおこなわれた。」

交戦国看護師の捕虜収容所視察は些末なトラブルを引き起こすこともあったようだ。例えば、ロシア赤十字がドイツ看護師の視察を妨害したという愚行に対して、皇太后は赤十字関係者に対して改善を求めている。

「6月2／15日 素晴らしい天気。10時30分、イヴァニツキー〔ボリス・エヴゲニエヴィチ、南西方面におけるロシア赤十字全権〕を引見。彼に次のことを話す。赤十字は、デンマーク代表と看護師の捕虜収容所訪問を妨げようとして、恐るべき愚かなふるまいをした。それで代表は、イリーン〔アレクセイ・アレクセエヴィチ、ロシア赤十字社幹部〕のところに戻る決定を急遽行った。彼にこれを修正することを命じるためである。」

ロシアは大戦において負けていたばかりではない。オーストリアとの南西方面において、ペレムィシュリ要塞を陥落させた（1915年3月9日）。4月上旬、南西方面の状況は良好と思われた。ロシア軍はガリツィアとブコヴィナの三分の二を占領し、カルパチア山脈を領有した。これを背景として、ニコライ2世自身が、ペレムィシュリ（4月10日）とルィヴォフ（4月11日）を訪問した。そこでは彼を数千人の人々が迎えた。他方、ロシア国内では、これを機に愛国主義であふれた。皇太后は、ペトログラードにおける熱狂を記している。

「3月10／23日 都市全体がペレムィシュリ陥落を祝していた。それでエヴゲニー〔・オリデンプルグスカヤ、アレクサンドル・ペトロヴィチ公爵の妻〕のところに行った。通りは、歌ったり、『ウラ』と叫ぶ人で黒山の人だかり。一日中深夜まで、数千の人々が、歌いながらまた『ウラ』と叫びながら脇を通っていた。」

だが4月18日の夜、独逸軍の積極的攻撃が始まった。ドナウ川戦線では、ロシア軍の砲の準備が独逸軍に著しく劣ったために、戦線が破れ、5月初旬には、ロシア軍はサン川のラインに退却を余儀なくされた。5月8日の夜にペレムィシュリは放棄され、5月27日、オーストリア軍は、ルィヴォフを占領した。かくして、ひと月の間で、それまでの戦争の果実が失われた。

この時期、講和活動の痕跡が日記に見える。東アジア会社社長アンデルセン（Andersen, Hans Niels）が、マリア皇太后の甥にあたるデンマーク

国王クリスチャン10世の支持のもと、イギリス、ドイツ、ロシアを訪問している。その関連で彼は皇太后を表敬訪問している。

「7月6／19日 午前中は比較的自由、素晴らしい天気。12時に私の忠実なアンデルセンが来た。大きな喜び。なぜならばあらゆる人とあらゆることについて再び聞くことができるから。正餐までとどまった。講和締結が必要であると考えている。激しい大虐殺。言語道断である。私は次のように答えた。私たちは戦争を望んでいない。しかし私たちは今講和について語ることはできないと。彼は最初にイギリスに行き、二度ジョージ〔英国王ジョージ5世〕に会い、自分の印象に非常に満足している。当然であるが、アリックス〔英国アレクサンドラ王太后〕に会い、多くの興味深いことを話した。」

「7月8／21日 …12時に愛想のよいアンデルセンが来て、正餐までとどまった。…フランス人の捕虜収容所で2時間カイザーといかにすごしたかというアンデルセンの話を聞くのは非常に興味深かった。カイザーの演説を聞いたが、彼は自己をほとんど半ば神のように思っている。彼は、誇大妄想に苦しんでいる狂人であるに違いない。全能であると信じている。私に宛てて挨拶をあえて送るとは、良心のない家畜のようである！アンデルセンは今夜出発する。それゆえに私は一日中庭でヴァルデマー〔皇太后の弟、デンマーク王子〕に対する書簡を書いていた。」

これに関しては、ニコライ日記には、7月8日に「アンデルセンを引見」という簡素な記録だけがある⁴⁾。ところで、マリア皇太后は、アンデルセンの講和活動に対して明確に否定している。「私たちは戦争を望んでいない。しかし私たちは今講和について語ることはできない」と。皇太后は戦争に関して不安を感じていても、ドイツと和を結ぶことは考えられないのである。アンデルセンの訪問は実を結ばなかった。

4) Дневники Императора Николая II, М., 1991, стр.537.

※ニコライ 2 世の軍総司令官就任

ニコライ 2 世は、開戦当初は軍総司令官に就任する意向をあらわにしたが、周囲の説得に応じてあきらめた。彼は戦争に真面目に立ち向かい、総司令部や前線に行き、派遣された部隊の閲兵をおこなうにとどめた。軍事作戦の指揮は総司令官となったニコライ・ニコラエヴィチ（Николай Николаевич）大公の掌中にあった。他方皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ（Александра Федоровна）は、ニコライ大公が、総司令部において、君主のような態度をとっていることを何度も夫に注意をして、夫が総司令官になるように助言している。ニコライ大公は、この時点ではラスプーチンに批判的になっていた。しかしニコライ 2 世は、司令官を信頼し、軍事作戦指導への積極的な介入はしなかった。それはともかくも、この件についての皇太后の日記には次のような記述がある。

「8月8／21日 パーヴェル・ベンケンドルフ〔国家評議会議員〕がしばらくぶりに私を訪問した。私たち二人は、戦線からの知らせと、巷間語られていることについて失望している。何よりも、悪人グリゴリー〔ラスプーチン〕が戻ってきたことと、またA.〔アレクサンドラ皇后〕が、ニコライ・ニコラエヴィチ大公に代わり、ニッキーが総司令官を引き受けることを望んでいることである。これを望むとは理性を失っているに違いない！」

ラスプーチンは、1914年秋にペトログラードに帰還していた。1915年初頭、アレクサンドラ皇后のお付きのアンナ・ヴィルボヴァ（Вырубова, Анна）が列車事故のために瀕死の重傷を負ったとき、皇后に呼ばれてヴィルボヴァの心を鎮めた。彼女は、ラスプーチンの「予言」通り、障害は残ったが、生きながらえることができた。これを契機にまたラスプーチンは、皇室の中に入り込んでいたのである。皇太后がラスプーチンをよく思っていなかったことは、1915年9月16日付のアレクサンドラ皇后のニコライ 2 世に対する次のような書簡から明らかである。

「エラギン〔マリア皇太后邸〕では、ガドン〔ウラジミール・セルゲエヴィチ、赤十字関係者〕が悪い役割を果たしているのではないかと心配してい

ます。なぜならばそこでは、私たちの友人〔ラスプーチン〕に反対する会話がひどいそうです。…かわいそうなお母様にお会いしたら、中傷に耳を傾け、それをやめないことが、どれほどあなたを苦しめているのかをきっぱりと言わなければなりません。そのことにより不和が生じますし、お母様を私と対立させることを、他人はきっと喜んでいるのでしょう。なんていやらしいのでしょうか⁵⁾。」

ニコライ 2 世自身は、軍総司令官を引き受ける件について皇太后のところに、皇后を連れずに、娘だけを連れて説明に来ている。

「8月12/25日 ニッキーは、4人の娘を連れて来た。彼は自ら話し始めた。ニコラーシャ〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公〕に代わって司令を引き受けると。私はひどく驚いたので、ほとんど卒中が起こりそうであった。これは大きな間違いであると私は言い、特にすべてが私たちにとって悪い今、これをおこなわないようにと懇願し、次のように付言した。これをおこなえば、これはラスプーチンの命令であると皆は見ますと。これは彼に影響を与えたと思う。なぜならば彼はひどく赤面したからである。彼は、このことが私たちと我が国に対していかなる危険と不幸をもたらしまうのかを全く理解していない。」

総司令官交代はラスプーチンの命令とみられるとの皇太后の批判も、ニコライの感情は揺さぶったが、彼の決心を変えるまでではなかった。なおこの日のニコライ日記の記述から皇帝の感情は見えない。「8月12日 2時半に娘たちと町に出て、エラギンのママのところに行った。ママ、クセニア、オリガ〔それぞれニコライ 2 世の妹〕と散歩した。茶を喫し、6時に帰った。執務をした⁶⁾」。

皇太后は総司令官を引き受けないようにとニコライに説得するために、ツァールスコエ・セローにまで出向いた。ニコライ 2 世に対する諫言に皇太后がここまで積極的になるのは、大戦期においては極めて珍しい。しかしそれも効果をもたらさなかったようだ。

5) Joseph T. Fuhrman (ed.), *The Complete Wartime Correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra. April 1914 - March 1917*, London, 1999, p.478.

6) *Дневники Императора Николая II*, стр.543.

「8月18／31日　3時45分、クセニアと私はツァールスコエに行き、もう一度運を試す。ニッキーはクロンシュタットに行き、ようやく7時に帰宅。私たちはアリッキー〔アレクサンドラ皇后〕のところで喫茶。彼女は、私を不安させることを除いて、すべてのことについて語った。彼女らと話をすることはできた。しかし結果が出なかった。9時に帰宅。」

「8月20日／9月2日　アレックはモギリョフから戻って来た。ドミトリー・パーヴロヴィチを連れてきた。まだ何かすることができるのかもしれない。私たちは少し庭を散歩した。その後男の子たちがやって来て、ニコラーシャの評価について話をした。彼に手を触れるのはいかに危険であるか。皆が彼に強く信頼を寄せているということである。お茶までとどまった。やりきれない状況。」

当時総司令部のあったモギリョフから戻ったアレック（・オリデンブルグスキー公爵、皇太后の娘オリガの義父）は、衛生後送部隊の司令官である。彼が連れてきた、ドミトリー・パーヴロヴィチ大公たちが、軍総司令官であったニコライ大公の評釈をする。「皆が彼に強く信頼を寄せている」ということを聞き、皇太后はやり切れない状況となる。

ニコライ2世は、総司令部に出発前に皇后とともに、皇太后のところに別れのあいさつに来了。皇太后は今一度総司令官就任を思いとどまるよう懇請する。

「8月21日／9月3日　今や、私たちは、またグロドノをも放棄した。全く非常に悲しい。非常に抑圧されたように感じる。正餐にニッキーと妻が来た。彼女は私のところに来るのは1年ぶりである。私は今一度総司令官をそのままとすることをニッキーに求めた。遺憾ながら、おそらくはうまくいかないであろう。彼は素晴らしく、意気揚々とした状態である。私には理解できない。それから私は彼と別れの挨拶をした、彼は明日出立する。」

皇太后は、ニコライの意気高揚した様子を理解できないと嘆く。ニコライ日記の記述は例によってそっけない。「8月21日　…その後11時半に、アリックス〔アレクサンドラ皇后〕と町に行った。救済者礼拝堂と要塞で祈るために立ち寄った。エラギンでママとクセニアとともに昼食。彼女ら

と別れのあいさつをした⁷⁾」。

8月23日、皇太后は、オルロフ（Орлов, Владимир Николаевич）中將（皇帝の軍事野戦官房長）が更迭されたことをコマロフ（Комаров, Владимир Александрович）中將（ペトログラード宮廷管理部長官）から聞く。皇太后は、「全く途方もない！このような彼に忠実で献身的な友人を」と嘆く。オルロフはニコライに忠実で献身的な友人あるがゆえに、ラスプーチンの影響力に批判的であったのだ。

「8月28日／9月10日 素晴らしいオルロフに会った。彼はすでに、遺憾ながら、ニッキーの傍にいない。非常に残念。献身的で忠実な人間という点でまれである。私は、彼がニッキーとともにいるとき非常に喜んだのであった。彼にはとても心を打たれ、すべてを正しくそして素晴らしく理解している。もっとも何らの説明もなしに彼が退けられたことに深く傷ついているが。しかしこれは彼〔ニコライ2世〕の意思ではなく、彼女〔アレクサンドラ皇后〕のあらゆるものに対する不正常な感じ方である。…」

皇太后の判断によれば、オルロフ解任は、皇帝の意思ではなく、皇后の不正常な感じ方に由来するのであった。

※1916年

皇太后の日記は基本的な私的なことがつづられているが、時たま政治や軍事に関する記述がみられる。例えば1916年初頭の次のような政変の記述がある。

7) Дневники Императора Николая II, стр.544. なお、ニコライ大公が5月からのドイツとオーストリアの攻勢のために精神的にボロボロになっていたことは、皇太后らには知られていなかった。

1915年5月11日、総司令部訪問後、ニコライ2世はアレクサンドラ皇后に次のように書いた。「私は、このような重大な状況において、ここから去ることができましょうか。私は、重大な瞬間に軍とともに残ることを避けたと理解されましょう。かわいそうなN.〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公〕は…自分の書齋で泣きました。そして私に対して、彼をより能力のある人物にとってかえることを考えるように求めました。…彼は私を抱擁し、私がここにとどまったことを感謝しました。私の存在が彼自身を落ち着かせたからです。」（Ibid, P.132）

「1月20日／2月2日 ついにクセニアを訪問する。そこでセルゲイ・ミハイロヴィチ〔大公〕に会った。彼は、年取ったずるがしこいゴレムイキン〔首相〕が辞職すると述べた。彼の代わりに、シテュルメルが任命された。奇妙な選択。」

首相にシテュルメル（Штюрмер, Борис Владимирович）が任命されたという記述に、皇太后は「奇妙な選択」という評価を加えている。当時のロシアにおけるドイツ・ヒステリー的狀況の中で、ドイツ風の姓名を持つものが選ばれたこと、またその選任にはアレクサンドラ皇后とそれを支えているラスプーチンの影響があるとうわさされたことなどが、その理由と考えられる。

ところで、ニコライ2世は軍の総司令官となり、前線に滞在することが多くなったが、首都に帰還した際に、冷淡な態度をとり続けていたドゥーマの開会式、ならびにアナトリア半島におけるエルゼルム奪取に関する祈祷に臨んだことが以下の記述からみられる。戦時における挙国一致がもくろまれたのである。

「2月9／22日 その後ニッキーが来た。彼はドゥーマ開会に際しての祈祷に出席した。明日彼は出発する。お茶には5時半によくミーシャが来た、彼もまたドゥーマ開会に行き、会議の最後までいた。」

駐露仏大使モーリス・パレオローク（Paleologue, Maurice）は、この日、ドゥーマ開会に際して祈祷がなされたときの議場の雰囲気を次のように記述している。

「議場ではものすごく雰囲気が高揚した。反動派、無制限の専制支持者は、怒りと失望に満ちた視線を交わした。ツァーリ兼神聖な君主が、神聖破壊をおこなっているかのようである。左派は、これに対して荒々しいものすごい喜びにあふれていた。多くのものには目に涙を浮かべた⁸⁾。」

前記のシテュルメルは、首相のほかにも内相も兼務したことを皇太后は記す。「3月8日／21日 シテュルメルは今や内相である。フヴォストフが辞職」。あまり細かい人事は日記に記載されないのが常なのだが、皇太后

8) Морис Палеолог, Царская Россия накануне революции, М., 1991, стр.36.

の見えるところ「奇妙な選択」だから記載されるのだろう。なおシテルメルは、のちにサゾノフ（Сазонов, Сергей Дмитриевич）の代わりに外相も兼摂することになる。これに対して皇太后は、きわめてあからさまに「外相ポストに対する不首尾な候補者（7月10日／23日）」と断じている。

※キエフへの移住

皇太后は、1914年夏ロシアに帰国以来ペトログラードのエラギン宮殿、のちにアニチコフ宮殿に住んでいた。1915年には6月初旬からキエフに行き、2週間ほど滞在している。娘のオリガが首都よりも前線に近いキエフで病院を経営し、看護師として働いていたので、彼女の働きぶりを観察に来たのである。また1916年5月1日夜10時半、皇太后らはペトログラードを出発し、3日午後2時半にキエフに到着している。そして皇太后はこの後決して首都に戻ることはなかった。

なぜ皇太后がキエフに移ったのかの理由は、日記には明示されていない。推測すれば、皇太后は前線に近いキエフの方が、赤十字活動などにおいて有用なことができると考えたということ。娘のオリガが活動をしていた場所であるというのも大きな理由であろう。さらにはペトログラードにおけるラスプーチンに関する噂に関して嫌悪を催し、首都を離れたのであろう。

日記からは皇太后が赤十字関係の仕事を継続していたことも見て取れる。具体的内容を持つものを引用しよう。

例えば、デンマーク人将校とともに捕虜収容施設を視察したドイツ人看護師がスパイの嫌疑を受けてしまったこと。

「9月15／28日 その後、クロムジン〔アナトリー・ニコラエヴィチ、国会評議会議長〕と2人のデンマーク人陸軍大尉ヴリフとクレブス博士を引見。後者は、近衛中尉の称号も持つ。ロシアに関する出張について話をした。ヴリフは、ドイツ人看護師と一緒にいった。彼女は、捕虜に手紙を伝え、そして彼らから送るための手紙を受け取ったと、虚偽の嫌疑を受けている。彼女らは、まさに間諜のように扱われていた。全くの混乱。」

デンマーク人医師からロシアの捕虜の取り扱いの素晴らしいとほめられたことも記されている。

「10月6／19日 非常に素晴らしい若いデンマーク人医師マルティニを引見した。彼は、ロシアにいる捕虜のために医療品を持ってきたのである。きわめて興味深く話をした。捕虜に関しては、当地においては非常に良く扱われていると彼は考えている。」

またドイツにおけるロシア人捕虜収容所の視察に関する記載もある。

「11月27日／12月13日 午後2時に6人の看護師を引見。彼女らは、ドイツにおける私たちの不幸な捕虜を訪問した。これは、サムソノヴァ女史、プーシキナ、侯爵夫人ゴリツィナ、クリューエヴァ、デ・ヴィット、シューベルト、ヒルコヴァの娘。彼女らのうちの2人は、自らの不幸な夫と会った。非常に興味深い会見。しかし全て非常に悲劇的であった。」

もちろんこれ以外にもキエフにおける皇太后の病院の視察の記述は日記においては事欠かない。

戦争の経緯に関して、キエフ滞在時における皇太后の日記には明るい記述が目立つ。1916年2月、南西方面総司令官に就いたブルシーロフ（Брусилов, Алексей Алексеевич）將軍のもとにおける攻勢にかかわるものである。ロシア軍がオーストリア軍の防衛線を突破したのである。

「5月23日／6月5日 昼食後シェルヴァシゼ〔ゲオルギー・ドミトリエヴィチ、皇太后の家政管理者〕は、私たちの軍がルーマニア国境で敵を撃破し、13,000人の捕虜を確保したと知らせた。」

「5月26日／6月8日 神の御加護を得て、ブルシーロフ軍団に関する素晴らしい知らせ。」

「5月29日／6月11日 神の御加護を得て、前線から良い知らせが来る。」

「6月5／18日 さらに一つ輝かしい勝利が得られた。多くの捕虜が得られた。主へ感謝。」

「7月15／28日 私のところでサンドロ〔アレクサンドル・ミハイロヴィチ、娘クセニアの夫〕が正餐をとり、彼は私たちの偉大な勝利の知らせをもたらした。主に栄光と感謝！」

7月22日は、皇太后が主催して、戦勝感謝の宴がおこなわれている。

「7月22日／8月4日 10時半に、ニッキーからの手紙を持ったエリストフを引見。祝祭の広間は祝賀のためにキエフがすべて集まっていた。クセニアが来て、私たちは、イグナティエフの教会に感謝祈祷に行った。この後、私により、祝典の昼食がおこなわれ、それには数人の近衛重騎兵が参加した。ズヴェギンツォフ、飛行士ヴォエヴォドスキー、2人－チュグエフスキー連隊から、3人－近衛海兵団から。ブクスゲヴデン、フォゲリ、エリス。すべては非常にうまくおこなわれた。」

※娘オリガの離婚と再婚

ブルシーロフ攻勢が終わる1916年秋に、皇太后自身にとって重大な家庭的問題、すなわち次女オリガの離婚と再婚が現実味を帯びる。

「9月20日／10月3日 少しアブラクシナ〔オボレンスカヤ公爵夫人〕とドライブに出た、ことのついでに私のベイビー〔オリガ〕についての話があった。彼女は離婚するつもりであり、これに対して完全な権利がある。しかし私にはこの話は重苦しく、不愉快である。」

そしてその翌日には新聞においてこの問題が取り上げられている。

「9月21日／10月4日 新聞においてベイビーの離婚に関する文書を読み、ものすごい衝撃を感じた。このようなものがどうして公開されるのか?!」

皇太后の驚きはものすごいが、ここにおいて皇族のゴシップがあからさまに新聞に出るところから、検閲の緩みが見て取れる。

すでにこの年の春にオリガは離婚する意向を皇太后に打ち明けている。さらに皇太后はオリガの夫であるオリデンプルグスキー（Ольденбургский, Петр Александрович）公爵にもオリガの意向を伝えていた。

「4月8／21日 ペーチャ〔ピョートル・オリデンプルグスキー公爵〕が昼食に来了。私たちは初めて率直に話をし、彼は泣いた。そのために私はとても無様な状況に陥った。」

オリガは皇太后の勧めで、1901年、オリデンプルグスキー公爵と結婚し

た。両者には子供はなく、結婚関係はうまくいかなかった。皇太后は承知していなかったが、オリデンブルグスキー公爵はゲイであった⁹⁾。

夫婦関係がうまくいかないオリガは、夫の副官であった近衛騎兵連隊の将校ニコライ・アレクサンドロヴィチ・クリコフスキー（Куликовский, Николай Александрович）と恋に落ちた。オリガは、離婚について直ちに提起した。しかし皇帝ニコライ2世は、判断を延期することを指示していたのであった。

1916年11月4日、キエフにおいて、オリガとクリコフスキーの結婚式がおこなわれた。皇太后は非公式に参加するという形をとった。貴賤結婚ではあるが、オリガの決断を尊重するという意味である。

「11月4／17日 愛らしいベビーは恐ろしく興奮している、サンドロが来て、私たちが彼女の結婚式に立ち会うときは教会の中で私たちが気づかれないようにする必要があるととりきめた。午後4時半まで家にとどまり、その後サンドロのところに向かった。そこではすぐにお茶を喫し、その後オリガとタチアナ・アンドレエヴナのところに行った。彼女らを教会に送るためである。そこには局外者の誰もいなかった。オリガは白いドレスを着て、冠をつけパールをかけていた。幸せそうな顔であった。2人の将校とプンカが婚礼介添人の役割であった。すべては全くあり得なかった。神よ、彼女を祝福し、彼女が愛するものを本当に幸福にしたまえ。すべてのスタッフは、愛情と情熱をもって彼女を迎えた。その後私たちは一緒に話をした。至る所に興奮と喜びが支配していた。」

同じ時期、皇太后がロシアに来て50周年という記念の節目が到来している。50年前、皇太后はロシア正教に改宗した。「10月12／25日 本日は私の聖油式から50周年、宗務院から電報を得た。」という記述がある。これ

9) 彼がゲイであるという噂は流れていたが、皇太后は信じなかったようだ。日記によれば、1918年に初めて彼女はそのことに得心している。「1918年7月20日／8月2日 金曜日いつものように、午前中にクセニアとオリガが来た。オリガは、パーチャの振る舞いに関するありえないことについて話をした。たとえ彼女が以前に彼と離婚をしていなくとも、今は彼女にはそうする動機があるであろうと。彼は、最新流行のゆがんだ関係のものすごい信奉者と交際をしているのである。何と恐ろしいこと！」

に際して、皇太后が式典を行った記述も見える。

「10月19日／11月1日　すでに午前10時にブルシーロフ將軍とイヴァノフ〔ニコライ・ユードヴィチ〕將軍を引見。彼らも私の記念日祝祭に参加する希望を表明した。その後ブルーギン〔アレクサンドル・グリゴリエヴィチ、前内相〕と〔テキスト空白〕公爵が来て、彼らはニッキーの詔書を読み上げ、ローマ数字“L”のついた勲章を手交した。非常に美しい。その後私は広間で祝辞と贈り物を持っているすべてのものを引見し、このことに非常に感動した。」

この際にキエフに集ったロマノフ一族の中から体制の危機、「革命の入り口」という言葉が語られたことが見受けられる。

「11月9／22日　その後ゲオルギー〔・ミハイロヴィチ大公〕が来て、彼とお昼に多くのことを議論。彼は状況を極めて暗く見ていて、私たちは革命の入り口にいと述べた。人心が憤激し、他方信頼が失われたからであると。きっと、ニッキーの4人との会話が彼の目を見開かせ、果実をもたらすであろう。アレクセーエフ〔ミハイル・ヴァシーリエヴィチ、総司令部参謀長〕、シャヴェリスキー〔ゲオルギー・イヴァノヴィチ、総司令部付首司祭〕、ニコライ〔・ミハイロヴィチ大公〕、最後にニコラーシャ。…彼らは彼〔ニコライ2世〕にあらゆる真実を語ったのだ。主よ、彼を助けたまえ！彼だけを私たちは期待することができるだけである！」

その翌日、ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、皇太后に対してニコライ2世への諫言を率直に話し始めた。「彼が私のかawaiiそうなニッキーに語ったすべてを聞くのは恐るべきことである。」と皇太后は記す。ただし、ニコライ・ミハイロヴィチ大公が何を語ったかは詳述されないが、次のことは知られている。

これより先、11月1日、ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、モギリョフの総司令部でニコライ2世と談話している。ニコライ日記には次のように簡潔に記されている。「正餐後、私のところで、ニコライ・ミハイロヴィチが長くどどまった¹⁰⁾」。翌日、ニコライ2世は、ツァールスコエ・セ

10) Дневники Императора Николая II, стр.610.

ローにいるアレクサンドラ皇后に対して次のように書いた。「ニコライ・ミハイロヴィチがやって来た。昨晚私たちは、長く話をした。そのことについて次の手紙で君に知らせよう。今日は時間がない¹¹⁾」。そしてニコライ2世は受け取った2通の書簡を皇后に送った。11月4日、皇后はニコライ2世に宛てて書簡を送り、ニコライ大公の書簡を「侮辱的」と断じ、「彼は追放されるべきです。どうして彼はあなたに対して、私に反対するようになると言えるのか。馬鹿らしく、卑怯」と怒りをぶちまけた¹²⁾。ニコライ大公の書簡は、革命の近いことを述べ、皇后がそれを挑発していること、そしてドゥーマから信頼される人物に政治をゆだねることを進言したものであった。即日、ニコライ2世は、皇后に対して謝る。「自分で書簡を読まずに、送付したのは悪かった」と¹³⁾。おそらくは、ニコライ2世は、皇后に対して批判的言説を伝えて、少なくとも問題の所在を理解することを求めようとしたのであろうが、この試みは失敗した。

※ラスプーチンの殺害

1916年12月17日の早朝、アレクサンドラ皇后の影で政治をコントロールしていると言われるラスプーチンが、皇太后の孫娘の夫にあたるフェリックス・ユスポフ（Юсупов, Феликс Феликсович）公爵のモイカ宮殿（ペトログラード）で殺害された。この件は、皇太后の日記には次のように即日反映されている。

「12月17／30日 その後、国家ドゥーマ議員 [テキスト空白]。ペテルブルクから直接来たが、きわめて喜ばしくない様子である。すべては非常に悲しく、将来のために非常に危険な結果に至るかもしれない。まさに正餐の前に、ラスプーチンが殺されたかのような噂が広まった。これが本当とは信じることができない。」

11) *The Complete Wartime Correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra*, p.1548.

12) *Ibid*, p.1555.

13) *Ibid*, p.1558.

名前が明らかではないドゥーマ議員がもたらした首都の状況の中にラスプーチン殺害云々があったのかどうかはわからない。しかし犯行当日午後には、ラスプーチン殺害の噂はキエフに達していた。この記述には記されていないが、それにはフェリックス・ユスポフ公爵さらに皇族の一員であるドミトリー・パーヴロヴィチ（Дмитрий Павлович）大公が関与していたのであった。犯行を行ったフェリックスは、キエフの皇太后の周囲では褒められている。

「12月19日／1月1日 午前中クセニアが来て、このあり得ない話についてのみ語った。皆は喜び、光栄ある功績に対して祖国の名においてフェリックスを褒めちぎっている。

私はこのことが行われたことを恐ろしいと考える。今はフェリックスとドミトリーが責められている。しかし私は1つの意見だけを信じない。状態は不愉快である。基礎が足下からゆらいでいる。」

皇太后は、皇后と接触あるもの（ダッキー、ヴィクトリア・フョードロヴナ大公夫人）から、皇后は物事をゆがめてみるということを書き留めている。

「12月20日／1月2日 ダッキーは再びお茶に来て、世間についてあらゆることについて話をした。彼女はアリッキー〔アレクサンドラ皇后〕との最近の談話について話をした。彼女はすべてを非常にゆがめてみて、いつもの強情とわがままで、私たち皆を不幸の縁に連れて行くのである。」

クセニアの息子フョードルがドミトリー大公のメッセージを伝えてきた。

「12月21日／1月3日 フョードルがやってきた。ラスプーチン殺害に巻き込まれたが、関与していない。ドミトリー大公の言葉を伝えた。ドミトリーは私に対して次のように伝えることを求めた。彼女〔アレクサンドラ皇后〕が、彼をいかに扱ったかを決して忘れないと。彼は電話をかけて、彼女に会うことができないかどうか尋ねた。彼女は拒否し、彼のところにマクシモヴィチ〔コンスタンティン・クラヴディエヴィチ、皇帝の侍従将官〕を派遣し、彼女の名前において監禁下にあると宣告させた。しかしこれを行う権利は彼女にはない。おそらく彼女は殺害への彼の関与を疑っているであろう。馬鹿げた話である。」

ドミトリー大公のメッセージが淡々と事実が伝えられているが、この中に皇后に対する暗黙の批判が含まれていよう。ドミトリー大公のメッセージは、キエフの皇族を凍り付かせた。アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公（サンドロ）は、叔父をキエフに逃れるよう手配した。他方フィリップの妻であり皇太后の孫であるイリーナとユスポフ家の両親も、キエフに来るように手配した。これが意味することは、皇后の怒りに任せた恣意から逃れるということである。キエフにいる皇太后の周辺のものが皇后の「復讐」におびえている様子が、きわめて詳細に如実に綴られている。

「12月22日／1月4日 サンドロは次のように電報を打った。自分の叔父を当地に送ることを予定し、もし彼が好都合と考えれば、イリーナと彼の両親も来ると言うこと。これが何を意味するべきなのかは、神のみぞ知る！」

翌日、首都にいたアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は、皇太后に対してニコライ2世に電報を打ち、事態を鎮静化することを要請する。ニコライ2世は当時ペトログラードに戻っていた。

「12月23日／1月5日 天気はひどい。サンドロからの電報が来た。彼は、私に対して私のニッキーに電報を打ち、彼がこの問題に蓋をするように助言することを求めた。横になる前に、ニッキーからの電報を受け取った。彼は私を安心させた。彼は事態を止めたと伝えたからである。神よ！」

皇帝は皇太后の電報に応じたようである。「捜査は直ちにとめられます。敬具。ニッキー」という返電が残されている¹⁴⁾。ただ、司法捜査は中断されたが、処罰がなされなかったわけではない。ロマノフ一族でありながら、ラスプーチン暗殺に関与したドミトリー大公は、自宅軟禁されていたが、懲罰のために首都から追放されベルシア戦線に派遣されることになった。しかも彼の父であるパーヴェル・アレクサンドロヴィチ大公を、ニコライ2世は引見することを拒否した。

「12月31日／1月13日 小さなマリアは早朝到着、不幸なパウリ〔パー

14) Coryne Hall, *Op. Cit.*, p.277.

ヴェル・アレクサンドロヴィチ]からの書簡を私に伝えた。彼は、息子が夜に突然ペルシアに送られた、それゆえに会うことができず、彼を祝福することもできなかったので落ち込んでいる。いとわしい話。彼女の話のために私の毛が逆立った。パウリをニッキーは受け入れさえしなかった。なぜならば、彼女のために何も決定することができなかったからである。彼女はすべてを憎み、そして荒狂うことを夢想している。これらすべてはいかに終わるのであろうか？」

皇太后の視点によれば、全ては「彼女」(アレクサンドラ皇后)の差し金であるという判断である。年明けにはニコライ・ミハイロヴィチ大公がキエフの皇太后のところを訪問している。彼は12月31日、「反政府集団」に参加した咎のために首都を追放されて、自己の領地に戻る途上であった。

「1917年1月5日 昼食に戻ると、すぐにニコライが来た。彼はいつもより平静であるが、それにもかかわらず少し興奮している。昼食後、私たちは心が触れる別れをして、彼は自分の領地に去った。」

ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、この訪問前に皇太后に対して次のように書簡で書いている。「催眠術師〔ラスプーチン〕を仕留めた後に、アレクサンドラ・フョードロヴナ、すなわち催眠をかけられたものの無害化に努める必要がある。ともかくも彼女をできるだけ遠くに送る必要がある。サナトリウムであれ、修道院であれ。問題になっているのは王権の救済である。…さらにそれからパーヴェル〔・アレクサンドロヴィチ大公〕、サンドロ、トレポフ〔アレクサンドル・フョードロヴィチ、首相〕、イグナティエフ〔パーヴェル・ニコラエヴィチ、宮内顧問〕、その他のものに話し、書いた。もっとも重要なことには触れなかった。なぜならば、全ロシアは次のことを知っているからである。ラスプーチンの終わりは、アレクサンドラ・フョードロヴナの最後を意味するということである。もし前者が撃たれれば、後者は追放されるべきである。まさにこのような代価を支払って全般的な沈静が可能となるのである¹⁵⁾」。皇太后もニコライ大公の見解に賛同していたに違いない。

15) Замуж за императора. Дневники жена Александра III, стр.419. 1916年12月17／24日付のニコライ・ミハイロヴィチ大公のマリア皇太后宛書簡。

「1月6／19日 首都は非常に不安な状況。主が私のニッキーの目を開けて、彼が彼女の恐るべき助言に従うことをやめれば。何という失望！これらすべては私たちを不幸へと向かわせる！」

首都の不穏な状況に言及しながら、皇太后は、現状における解決策は、ニコライ2世が、「彼女（アレクサンドラ皇后）の恐るべき助言」に耳を傾けるのをやめることと考えているのである。しかしニコライ2世にはこれができなかったことは、ニコライ・ミハイロヴィチ大公の以前の試みで示されていた。

さて、1月19日、皇太后はアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公から首都に行くことを勧められる。皇帝に対する事態鎮静化の助言のためであろう。だが皇太后は自分の行動の効果のなさを考えたうえでためらう。「…これはおそらく何の役にも立たないであろう。これらすべての恐ろしい事件は、私を非常に不安にさせている！」とつぶやく。赤十字の事務を統括しているイリーンも、皇太后の首都行きに反対している。「1月26日／2月8日 10時半イリーンを引見。彼は私に対してペテルブルクに行かないように懇請した。その状況が恐るべきものであるから。彼は、大臣会議のすべてのメンバーが罷免されたことに我を忘れていた。」

2月2日には、クリミアで療養していたミハイル・アレクサンドロヴィチ大公が首都に行く途上、キエフに立ち寄った。彼は、皇帝が総司令部のあるモギリョフを長期にわたり不在にしていることに不満が高じていることを伝える目的があった。同日、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は再び皇太后を首都行きに誘っているが、相変わらず皇太后は「しかし私はそこに行きたくない。なぜならばそこで私が何かをできると思わないからである。これは何と悩ましいことか！」と拒否している。

※ 2 月革命

首都の状況は悪化するばかりであった。

「2月27日／3月12日 ペテルブルクからは非常に不安な知らせ。恐るべき。ニッキーが戻っていると言われている。これは重大なことに違いな

い。救いようがない！戦争の最中である。指導者が悪いのかそれとも顧問が悪いのか。これらすべては私たちをどこに連れていくのか。」

皇帝は、ペトログラードにおける混乱と広まったストライキ運動のために、開会したドゥーマを解散し、イヴァノフ（Иванов, Николай Юудвич）将軍に対して即座に秩序を回復するよう命じた。しかし2月27日、部隊は公然と反乱を始めて、政府の建物の奪取を始めた。皇帝は、総司令部のあるモギリョフから、この日朝早くに首都に帰還しようとした。

皇太后は、首都からの情報不足に苦しむ。また皇后が全てを掌握し、全ての問題の源泉であるという観点から次のような記述をする。

「2月28日／3月13日 ペテルブルクから全く何の知らせもない。非常に不愉快。イグナティエフ家が昼食に来た。彼もまた何も聞いていない。ドゥーマは閉鎖された。なぜかは明らかであるが、この問題は彼女〔アレクサンドラ皇后〕の掌中にあると言われている。この瞬間において、またぞろ恐ろしい誤り！このような責任を引き受けるとは、実際に気がふれなければならないであろう。」

首都を目指していた皇帝の列車は、混乱のために途中で止まらざるを得なかった。このあたりの状況も即時にキエフに伝えられている。

「3月2／15日 サンドロが正餐に来た。私のかawaiiそうなニッキーがブスコフにいて言われている。私は今、この悪夢の全貌についてだけ考え、話すことができる。クセニアから電報を受けた。その中で彼女は、ニッキーがどこにいるか誰も知らないと述べている。起きていることがおぞましい。主よ、私たちを助けたまえ。」

さらには、ニコライ2世の譲位の情報も同様に伝わっている。

「3月3／16日 9時15分にサンドロが、恐怖を呼び起こす知らせを持ってきた。ニッキーがミーシャのために譲位したようである。私は完全に失望した！このような悪夢に耐えるために、生きることにかいがあるのかどうか考える！彼〔サンドロ〕は、彼〔ニッキー〕のところに行くことを提案し、私はすぐに同意した。」

皇太后は譲位の知らせに絶望するが、しかしアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公の要求に即座に答えてニコライ2世に会いに行くことを決意し

た。翌日昼の12時に皇太后一行はモギリョフに着いた。皇帝の列車はプスコフからモギリョフに引き返したのだ。

「3月4／17日 よく眠れず。もっとも寝台は快適であった。ものすごく大きな不安。12時にモギリョフの総司令部に着いた。恐るべき極寒と暴風。親愛なるニッキーは、駅で私を迎えた。悲しい再会！私たちは一緒に彼の家に向かった。そこで全員を伴う正餐が供された。…正餐後、かわいそうなニッキーは、2日間に起きたすべての悲劇的事件について話をした。はじめはロジャンコ〔ミハイル・ヴラディミロヴィチ、ドゥーマ議長〕からの電報が来た。その中において次のことが述べられていた。彼は、秩序を維持し革命を止めるために、ドゥーマとともに状況を自分の掌中に受け入れることになっている。そしてそれから、国を救うために、新しい政府を作ること、そしてニッキーに対して自分の息子のために譲位することを提案した。」

ニコライは、血友病のために健康に不安がある長男アレクセイに譲位することは不可能と考え、ミハイル大公に譲位することを自ら提案したのだ。

翌3月5日、皇太后はオリデンブルグスキー公爵や宮内大臣フレデリクス（Фредерикс, Владимир Борисович）から、ニコライを外国に亡命させるように示唆を受けた。皇太后はこれをニコライに伝えている。ニコライは慎重であったことが記録されている。3月7日、また同じような助言を皇太后は、アレクサンドル・ペトロヴィチ（Александр Петрович）大公とイギリスの駐在武官ウィリアムズ（Hanbury-Williams, John）から受けて、ニコライに伝えている。しかしツァールスコエ・セローにおいては、ニコライの子供たちがインフルエンザで臥せっているので、実行は困難と皇太后は考えている。

「3月7／20日 アレクサンドルが来た。ニッキーに対して、ツァールスコエ・セローから去るように懇願した。その後すぐにさらに遠くに行くようにと。病気の子供を連れて一緒に去るように。言うことはたやすい。何と厳しいことか！さらに神よ、助けたまえ！私は彼に対して、アレクサンドルとウィリアムズが、ツァールスコエ・セローから去ることを助言し

たと述べた。」

3月8日、ニコライはツァールスコエ・セローに移動することになった。「3月8／21日 本日は、私の人生で最も悲しい日！私は愛するニッキーと別れた。」翌日皇太后もモギリョフを発ち、10日にキエフに帰還している。そして短時間でキエフの町の様子がすっかり変わったことに驚き、あきれろ。

「3月10／23日 金曜日 キエフに11時に着いた。全てはなんと変わったことか！駅には、誰もいず、プラットフォームには赤いリボンをつけた市民だけがいた。厭わしい！宮殿の上には、旗がなかった。ついに私のニッキーから電報を得た。彼はツァールスコエ・セローに着いた。彼は自分の家族と会うことを許されていないと言われている。ひどい卑劣漢！」

「赤いリボン」は臨時政府に対する忠誠を表すためにつけられている。そして宮殿の上には皇室の旗がなかった。

※クリミア

皇太后はクリミアに行く提案をアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公から受けている。皇太后はこれを断った。皇太后の配偶者であるアレクサンドル3世の最後の厳しい日々を過ごしたのが、クリミアであり、皇太后にはそこは苦しい感情を思い出させる土地であること。さらには、息子のニコライの少しでも近くにいたいという願いのためであろう。そして皇太后は相変わらずキエフにおいて病院訪問を継続した。しかし、ある日、病院の門が閉ざされ、さらに主任の医師から、皇太后の存在は望ましくないとはっきりと告げられて、はじめてキエフから出発することに同意したという。この時期までに、キエフ地方ソヴィエトは、かつての皇族全員に対し町から出る必要があるという命令を出していた。

皇太后らは3月23日にキエフを発っている。随行したのは少数のものである。安全の名目で政府から同行者がつけられていた。

ところで、皇太后のクリミア滞在の日記は、1917年4月26日から始まっている。その日の記述は、ある意味クリミア滞在に特徴的なことを集中的

に表していた。午前5時から午後5時まで、アイトドルの皇太后邸において、セヴァストポリー・ソヴィエトによる抜き打ちの搜索がおこなわれた。目的は秘密文書を明らかにするためと記されている。ニコライ2世の治世の問題点を洗い出すことがもくろまれたのであろう。それはともかく、起き抜けにいきなり侵入して来て、問答無用に搜索を始めた関係者に、皇太后は怒りをぶちまけた。皇太后はこの日を「私たちを恥辱で満ちた日」として決して忘れないとする。

「私は彼らに対して不満をきつく表明した。確かに、私がまさに何を言ったのかを正確に私は覚えていない。私は我を忘れていたからである。将校が相当怒って『あなたは私を侮辱している』と述べたことだけを覚えている。これに対して私はきっぱりと答えた。『私があなたを侮辱しているのではなく、あなたが私を侮辱しているのです。』」

「彼が隣の部屋にいる間に、私の寝室は、多数の水兵で満たされた。帽子を取る暇もない程である。彼らは赤いリボンをつけ襟章に花をつけ歩きまわり、衝立越しに私を見ていた。私は凍えた。同時に私は怒りから汗が流れた。私が、最下等の犯罪者のように扱われたからであった。」

クリミアにおいて、皇太后は当初は娘たちとともにアイトドルの領地に居住した。そのほか、チャイルの領地には、ニコライ・ニコラエヴィチ大公たち、デュリベルの領地には、ピョートル・ニコラエヴィチ大公たち、コレイズには皇太后の孫イリーナと夫のユスポフ公爵が住んでいた。これらの領地すべては監視下にあった。監視部隊は72人で編成され、大部分は黒海艦隊の水兵と陸軍少尉補B.M. ジョルジャリアニ指揮下のヤルタ義勇隊の兵士からなる。

皇太后はこの監視の息苦しさに憤る。この件に関する記述は頻出するが、次のようなものが典型的である。

「7月17／30日 監視人からのどれほどの侮辱を、私は耐えるのであるか、それほどの不快を私におこなうのであるか！娘たちと少し庭を散歩した。昼食後すぐに医師が到着した。子供たちを診察するためである。しかし彼は診察を始めるや否や、あのムカつく下士官がやって来て、もっとも恥知らずなやり方で、医師の名前が日直当番のノートに記載されてないと

述べて、彼を追い出し始めた。この医師は非常に驚き、すぐに去ろうとしたが、クセニアの強烈な介入のために、とどまった。この医師が、ここにおいて私たちがいかに扱われているのかを見たことは、よいことである。」

「7月19日／8月1日 私たちは今や逮捕されたかのようである。誰もアイトドルの領地外に出ることができず、また誰も訪問することが許されない。恥辱！そして誰もなぜなのかを知らない。これは本当の卑劣さであり、彼らに権力があることを示すためだけのものである。」

このような抑圧的環境の中において皇太后の日記に頻出するのは「憂鬱」である。以下の引用に典型的に表れている。

「5月16／29日 よく眠れなかった。以前と同様に恐ろしい憂鬱に襲われた。それはおそらく、周囲のものに対しても、また私に対しても苦しいものである。それに加えて、サンドロはひどく暗い雰囲気であり、ずっと沈黙している。」

憂鬱にふさぎ込んでいるのは皇太后だけでなく、娘婿も同様である。そのような皇太后の慰めは、親しい者からの便りである。しかし戦争、革命という状況の中で便りが届かない。

「5月2／15日 私にとってなんとひどい打撃であるか。私の親愛なるものからの知らせがないのである。彼ら全員の手紙が、別れた状況における唯一の慰みとして今まで働き、私の単調で閉ざされた生活において激励を与えたのである！」

しかし困難な状況であっても、実姉の英国王太后やデンマークの親族からの書簡が人を介して届いたのである。

「6月30日／7月13日 午前中はいつものように娘たちと過ごした。その後グルズフからアブラクシナが帰還した。筆舌に尽くしがたいほど嬉しいことに、私は、愛するアリックスから美しい書簡の束を、4ヶ月に渡る退屈な待機の後について突然受領した。彼女から11通の書簡、そして、愛らしいヴァルデマーとクリスティアンから1通ずつ。知った筆跡を見て、私は自分が新しい生命に生まれ変わったと感じ、あたかも別人になったかのようである。この手紙を読むだろう数日における満足を予め先取りして感じた。」

さらには前年再婚した娘のオリガが男子を生んだ。このことは周りの雰囲気明るくした。

「8月12／25日 私とアブラクシナが正餐をとった。彼女が去ったとき、ジーナが来てベジクをした。突然部屋に私の素晴らしいコサック・ポリャコフが走って来て、私に対して孫の生誕を祝した！私は直ちに自分の車を呼んで、オリガのところに駆けつけた。クセニアは私よりも先に彼女のところに來ていた。私は大きな喜びを感じ、本当の楽しみを感じた。自分のベビーを生んだオリガが非常に幸福であることを見たときに。このような素晴らしいことが起きたことに対して、主をたたえて感謝した！医師は遅れた。彼は、子供が世に現れた直後に來た。その代わりに産婆は、すべてを一人で処理したことにきわめて満足し誇りを感じていた。かわいそうなクリコフスキーは、これらすべての大きな動揺の後において自分をなくしていた。私たちは皆抱擁し、互いに感謝した。」

ところで、モギリョフで別れたのちに、離れ離れとなったニコライ2世たちの消息が気になるが、なかなか手に入らない。8月7日、ペテルブルクから帰還した孫のイリーナからの情報を得ている。「ニッキー一家」はツァールスコエ・セローからトボリスクに移されると聞いて、皇太后は心臓発作を起こしそうな衝撃を受ける。ただし、その中でも期待できるのは、トボリスクではツァールスコエ・セローよりも安全であるということだ。しかし臨時政府が初めはリヴァディアに行かせると約束して、うそをついたということを捉えて、「ニッキー一家」が良心的に扱われていないと書いている。このように相当正確な情報が伝わっている。その二日後「ニッキー一家」のトボリスク移転に関する公式発表に関して日記に記されている。皇太后はすでにその事実を知っていたのだが怒ってしまう。8月26日は、オリガに対して子供が生まれたことに関してトボリスクから電報が届く。しかしそこにはニッキーの署名はなかった。またニコライ2世から皇太后宛に直接書簡も届いた。1917年には3か所、皇太后の日記に書簡受領の記述がある。3通届いたのであろう。10月2日、10月17日、11月17日である。記述内容が具体的な最初の記述を引用する。

「10月2／15日 金曜日 ものすごく喜んだことに、トボリスクにいる

私の愛するニッキーからの書簡を受領した。彼は、彼らがそこでいかに生活をしているのかを記述している。彼らは庭にだけ出ることが許されている。そこで彼らは、時間を過ごすために、あらゆる遊びを行っている。そこからは山や森に対する素晴らしい光景が開け、それは彼らにとってはとても魅力的である。恐るべき生活とものすごく大きな不正！」

アイドルの警備状況は、外部の状況に応じて変化する。例えば次のような記述がある。

「8月29日／9月11日 ポリャコフが来て、アイドルが閉鎖されると知らせた。皆に対して入口と出口が閉ざされる。セヴァストポリにおいて私たちが貶め辱めるために考えられた、また一つのニュースである。これがいかに不愉快であったとしても、私たちは実際のところこの卑劣漢により逮捕されているのであるから、何のため？」

警備強化の理由を皇后は自問しているが、その日の続きの記述の中に答えを見つけることができよう。「コルニーロフ事件」が起きていたのである。

「状況は益々悪化している。コルニーロフ将軍はケレンスキーに対して権力を捨てて新しい政府を編成することを提案したという。しかしケレンスキーは、当然であるが拒否し、コルニーロフを解任し、ある種の宣言を出した。そこにおいては、コルニーロフは裏切り者で暴徒として宣言されている。」

ロシア軍総司令官に任命されたコルニーロフ（Корнилов, Лавр Георгиевич）将軍が軍を伴い首都を目指していた。それに対してケレンスキー（Керенский, Александр Федорович）首相が彼を解任した。しかしコルニーロフは進軍を継続したが、率いた軍が解体したために首都における戦闘は避けられた。皇太后はコルニーロフに同情的な記述を残している。

「8月30日／9月12日 コルニーロフは文書に調印し、その中において次のことを率直に述べている。すなわち、ケレンスキーはうそつきであり、国を破産に向かわせ、ドイツ参謀本部の直接の指示に従い活動をしていると。すべての大臣は辞職した。」

「9月1／14日 この卑劣なケレンスキーは、自らを総司令官に任命し、他方アレクセーエフ将軍を参謀長に任命した。これは明らかな裏切り！彼はコルニーロフ将軍と彼のスタッフをすべて逮捕した。日ごとに状況は益々悪化していく。」

首都の混乱は継続した。ボリシェヴィキ政権奪取の報が届いている。

「10月27日／11月9日 噂は裏書された。ボリシェヴィキが政府を倒し、逮捕した。それゆえにすべての権力は今や彼らのもとにある。14人のボリシェヴィキが選ばれた。その中には、レーニン、ジノヴィエフ、トロツキーなどがある。彼らはみな偽名のユダヤ人である。私たちは、書簡も、新聞も受け取れない。レーニンをドイツは封印列車でロシアに運んだ。なんという卑劣、なんという輝かしい見世物を彼らは演じるのか、このろくでなし…」

ボリシェヴィキに対する反感に加えて、外部世界から情報が取れないことを皇太后は嘆く。11月4日、皇太后は、派遣されているコミサル・ヴェルシニン（Вершинин）と領地を監視しているジョルジェリアニと談話をおこない、首都の模様を聞いている。その中で冬宮が破壊された様子がわかる。皇太后は絶望する。「現在の瞬間には、いかなる政府も思い浮かばない。私たちは、荒れ狂う海を舵や帆なしで航行している船に似ている」と。

また皇太后の側近が、ドイツ軍が進軍してクリミアに秩序を打ち立てる可能性に言及して、彼女のドイツ嫌いを引き起こし、怒らせてしまう。

「11月9／13日 その後アブラクスイナがシェルヴァシゼを連れて現れて、当地に秩序をもたらすために、すぐにドイツ人が来ることが予期されると述べて、私をイラつかせた。彼らは、あらゆる手段でカイザー・ヴィルヘルムをほめそやし、最後には私を怒らせた。これは私の弱っている心臓には非常に悪いのである。」

皇太后は日記には物資の欠乏に関して、実際あったはずなのであるが、めったに記述しないが、この時期には次のような記載がある。

「11月11／24日 バターとお茶は私たちにはもはや供給されない。バターとして売られているものは、食べられない。幸いなことに、私のとこ

ろには当面少しの良質のお茶が残っていた。砂糖もまたきわめて節約せざるを得ない。…言われるところによれば、ヤルタにはクリミア連隊から騎兵中隊がやって来た。これには住民が皆喜んだ。私たちを当地で監視しているジョルジェリアニは、彼ら〔騎兵中隊〕と水兵との間に誤解が起きるかもしれないと考えていて、私たちの警備を強化することを必要としている。」

物資の欠乏だけでなく、秩序の混乱に伴う派兵が新たなトラブルを巻き起こす可能性が示唆される。さらにヤルタが外部世界から切り離されたために親しい者の便りが届かなくなり、皇太后はまた困惑を深める。

「11月13／26日 私は、少しでも可能性があるときは、アリックス、テューラ、ヴァルデマーに対して書簡を書いている。しかし誰からいかなる葉書も受け取れない。これがどれほど私を抑圧しているか、これはまことにもって真の試練である。」

最後にポリシェヴィキがドイツとの単独講和をはじめ、その混乱に関する記事を皇太后は読み、怒りがマックスに達する。

「11月19日／12月2日 完全な混沌。全く憤激。この状況は許容できない。…それからすべての子供が私の所でお茶のために集まり、新聞を読んだ。世界では、何かしらあり得ないことが起きている。今この卑劣漢たちは、ドイツと単独講和を締結しようと努め、連合国に対して12月6／19日に返事をするようにとの要求のついた通牒を発出した。トロツキー、クルィレンコの一党は、ドゥホーニン將軍の全権を否定している。もっとも陸軍は彼を支持し、今までのところ〔総司令官としての〕クルィレンコを認めていない。完全な混沌、まったく憤激、このような状況をどうして許容することができるか?! すべてはあべこべに解されているからである。」

※1918年

1918年の皇太后の日記は6月6日から始まる。この間、アイトドルの領地を警備しているコミサールの交替があった。前年12月に、ジョルジェリアニは、ザドロジュヌイ（Задорожный）に取って代わられたのだ。

前者は、皇太后に対して丁寧な言葉遣いをしていた。さらに、皇太后を水雷艇でヤルタからセヴァストポールに連行するという試みがあったが、皇太后の健康にとって危険であるという理由でジョルジュリアニが反対したことなど、皇太后はともかくも、そのお付きのものからはある種の信頼を得ていた。これに対して、ザドロジュヌイは皇太后らに対して疎遠な態度をとっていた。

このザドロジュヌイから、皇太后らは、アイトドルからデュリベルに移ることを求められる。デュリベルにはもともとピョートル・ニコラエヴィチ大公が居住していたが、クリミアにおけるロマノフ一族が集められた。移動は2月26日と指定された。移動の理由はロマノフ一族を保護するためであった。なぜならば、そこの館は三方が高い壁に囲まれていて、四番目の側は、海へと降りてゆく崖であったからである。

このデュリベルが、4月9日から15日かけて、戦乱に巻き込まれる。ヤルタから別系統の派遣隊が到来し、デュリベル領地に入ろうとしたのである。ザドロジュヌイは、何人であれ領地に入ることを拒否した。さらに人数不足のために皇族も警備に就くことが求められた。寝ずの番が続いた後にようやく15日、派遣隊はヤルタに引き返した。その後デュリベルにはドイツ人将校も現れた。

皇太后のお付きのメンゲデンは次のように記している。

「4月21日 夜は復活祭のお勤めが行われた。それには、この機会に私たちのところに来た、多くの隣人が参加した。その後、ニコライ〔・ニコラエヴィチ〕大公のところで復活祭を祝した。復活祭の食事を作るために、種々の人々からの援助を受けた。しかしそれにも関わらず正餐は極めて質素。テーブルに着いた賓客の中には、ザドロジュヌイもいた。私たちの救済者であり、ついに公然と精神構造と本質を示すことができたのだ。…ドイツ人は、皇太后とニコライ大公に対して完全な移動の自由を提起した。しかし彼らはこの許可を利用することを望まなかった。デュリベルにおける生活は、今や非常に変化した。隣接する領地の主人が私たちにあいさつに来て、私たちは同じことをしているのである。堤防が決壊したとい

う感じが現れた。そして私たちは自由を楽しむことができる¹⁶⁾」。

ドイツ軍提示の自由の享受を拒否することは、ドイツ嫌いの皇太后のプライドの問題に過ぎない。自由を否定するわけではない。さらにこのころ、白軍に属する将校の一団が来た。彼らは、水兵に代わり、皇太后らの警備を引き受けた。白軍将校たちは内部に配置され、他方ドイツ人警備隊は外部に配置された。すなわち皇太后のドイツ嫌いとは裏腹に、ドイツ軍と白軍による治安維持が形成されたのだ。

事態が鎮静化したのちに皇太后らは海沿いのハラクス領地に住居を移すことになる。そして中休みが到来したのだ。それを反映してこの年の皇太后の日記記述の基調は穏やかなものである。ドゥボヴァヤの森へのピクニック（6月23日）、ミスホルの海辺への散歩（6月27日）、ペチューシャ〔ピョートル・ニコラエヴィチ大公〕の誕生日にデュリベルに行く（6月29日）など、自由を満喫している。7月3日に、皇太后はドイツ人将校を通じて妹のテューラ（ハノーファー王太子エルンスト・アウグスト2世妃）からの書簡を受け取っているが、即座に彼女に対して、「私たちは全く素晴らしい状態で、丸一年幽閉で過ごしたのちに、自由です」と返信している。

上で引用したメングデン日記の一部に示されていたように、コミサル・ザドロジュヌイは皇太后たちの救済者として復活祭にも招かれていた。彼が皇太后を救ったと言っても過言ではない。ザドロジュヌイはこのあたりの事情をのちに皇太后にあけすけに語っている。

「9月19日／10月2日 水曜日 非常に早く起きた。その後オリガが来て、突然彼女に続いてザドロジュヌイ。私は、彼と再び会えたことが非常にうれしい。私たちが冬の間耐えてきたすべてのことについて、彼と長く話をした。私は、初めは彼のことを嫌な人で、本当の刑吏であると考えたと述べた。彼は笑い出して、次のように答えた。彼はそのようなかのように様子を見ざるを得なかった。そうでなければ彼は追放され、もっとも悪い

16) Зинаида Менгден, Воспоминания графини Зинаиды Менгден, переданное в разговоры, стр.195. 1943年に公刊されたジナイダ・メングデンの回想録（デンマーク語）の露訳。以下のサイトを参照のこと。 <http://dagmaria.dk/mobile/index.html>

ものにとって代わられたであろうと。彼は私を見つめる決心がなかった。私が殺される予定であると知っていたからであった。彼には非常に心痛であった。これは何と感動的なことであるか！またぞろ彼にすべてを感謝することができて、私は非常にうれしかった。」

さてニコライ 2 世たちも1918年4月に、身柄をトボリスクからエカテリンブルクに移される（4月13日発、17日着）。これに関しては、7月14日、皇太后はトルスタヤ女史の書簡で初めて知った。「彼女は、私のかわいそうな天使ニッキーの生活の悲惨な細部を知らせている。小さなアレクセイがひどい病気であるとき、両親はトボリスクから追放されたようである。前代未聞の苛烈さ。殺人的である。」トボリスクからの出発前後、ニコライの息子アレクセイは鼠径部の痛みで寝込んでいた。それゆえにエカテリンブルクに出発したのはニコライ、アレクサンドラ、三女のマリアだけであった。残りの子供たちは5月10日、エカテリンブルクに合流している。

7月17日には、トルスタヤ女史の書簡を運んだ人物が皇太后に会い、その人物がエカテリンブルクにおけるニコライ一家が収容されている様子を述べていることが記録されている。

「家は、二つの方向から高い壁により囲まれ、このために何も見ることができない。彼らにはほとんど全く食べ物がない。彼らを王党派が助けるであろう、5本の牛乳やその他の食料品を届けている。デレヴェンコ医師、かわいそうなドルゴルコフとイリーン、ナステニカ・ゲンドリコヴァ、シュネイデルが、多くの従僕と同様に拘留されている。最大限の卑劣！」

そして7月17日、ニコライ一家は、エカテリンブルクのこの建物で家族全員とともに処刑される。皇太后の日記において、ニコライの死に関する記述が出るのは7月21日が最初である。「私たちの愛するニッキーの運命に関する恐ろしい噂が広まっている。それを信じることもできないし、欲もしない。」

ここに示されているように、皇太后はニコライの死の情報を信じようとしない。日記を見れば、皇太后には、ニッキーが解放された、あるいは生

存しているという様々な情報が寄せられ、皇太后をそれにすぎる。例えば次のようなものである。

「8月24日／9月6日 彼〔ケルレル将軍〕の話聞くことは、尋常ではなく興味深い。彼は、ある将校と話をした。その将校はドルゴルコフ公爵と会い、そしてドルゴルコフは彼に対して、自分の部下がニッキーを解放して、彼らを軍艦に乗せて安全な場所に運んだことを伝えた。これは本当であろうか？神よ！」

ドルゴルコフ（Долгоруков, Василий Александрович）公爵は、ニコライ2世にエカテリブルクまで付き従ったが、ニコライらと引き離されていわゆるイパチュフ館には入れず、別途収監され処刑された。旧露軍将軍の伝えたことは明白なフェイクニュースである。

これに対してニッキーの死を前提としているものは、それが親しい者であっても皇太后の心を傷つける。

「9月26日／10月9日 親愛なるクリスチャン（デンマーク国王クリスチャン10世）からの書簡がもたらされた。それは私の心を深く傷つけた。彼らは皆、私のニッキーに関する恐ろしい噂を真実であると信じているのだ！」

※ロシア出国へ

1918年秋のころから、皇太后にクリミアから去るようという声が日記に記録され始める。

9月10日、皇太后は親しい軍人カズナコフからドイツの状況が悪いので、それに伴う混乱を見越して退去を勧められたのであるが、皇太后は混乱するばかりである。皇太后によれば「神の指示」がまだ見えないからである。ドイツ皇帝の退位という噂が乱れ飛ぶ中で、10月27日、同じ軍人は、ルーマニア王妃（ミッシィ）からの書簡をもたらす。皇太后を外国に去るよう促すものであった。皇太后はそれを拒否する。

「10月28日／11月10日 夢を見た。私たち皆が、私たちをここから運ぶ船にすでに乗っていたようであった。クセニアは、教会のお勤めの前に来

て、ニコラーシャとスタナ〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公夫人〕は私の見解に賛成していると話して、私をなだめた。当然、私は、カズナコフの善良な意図とミッスイが表した配慮にとっても感動している。しかし、大きな変化をもたらすであろう、休戦のとは口々に今私たちがいるとき、これは必要ないのである。」

実際にクリミアを占領していたドイツの撤退が現実化する。

「10月31日／11月13日 ドイツ人将校バルトリドが電話、そして、クリミアから去る命令を受けたと伝えた。おそらく私たちは同盟国が来るまで運命の恣意に任されるのである。…サンドロは私の家に来て、茶を喫した。彼はまだ何かを言いたいようだと思えた。彼は私に対してアリックスに電報を打ち、私たちが一時的に昨年と同じような状態にいるということを彼らに知らせるように求めた。私は彼にテキストを渡した。」

ドイツの撤退に際して、皇太后は同盟国の到来まで自己の運命は恣意にゆだねられると観念する。これに対して娘婿アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は、イギリス王太后に助けを求めるよう訴え、認められたのであった。なおドイツ撤退ののちに、11月3日に、白軍の将校5人が皇太后邸の警備についている。

そして11月7日、皇太后の前にイギリスの海軍将校が現れて、英国王ジョージ5世の名前において皇太后を軍艦に迎えると述べた。

「私はとても感動していると述べ、感謝した。しかし彼に対して、私の言葉を理解しているのかと尋ねた。私は彼に対して次のように説明した。いかなる危険も当地においては私にはもはやなく、私はこのように逃げることを自分に許すことは決してできないのであると。」

皇太后は喜んだが、イギリスの申し出をかたくなに拒否した。その理由には合理的根拠がなかった。「いかなる危険も当地においては私にはもはやない」などとは決して言えないはずであった。もっとも皇太后はイギリスに対する好意は変わらず、イギリス艦の動きを見ている。

「11月9／22日 イギリスの駆逐艦は、午前中ずっと、沿岸に沿って前後に移動して、私の目を楽しませた。イギリス軍艦の操練を観察することができて何と素晴らしいことか。これだけで皆をして彼ら〔イギリス人〕

を尊敬させるのである。別の軍艦は昨夜コンスタンチノーブルに去った。」

さらに、11月12日、イギリス人大佐ボイルが来て、ルーマニア王妃からルーマニアに発つようにとのメッセージを再度伝えた。しかし皇太后はかたくなに拒否する。11月15日、ジョージ5世の提案を伝えるために、キャプテン・ロイズが皇太后を訪問する。これも皇太后はこれを拒否する。

「12時に、ケンテルベリ艦長、キャプテン・ロイズが来た。私は彼と再び会うことが非常にうれしい。彼はジョージの親切な提案を繰り返し、私に対してローマに来るようにとのイタリア国王の招待を伝えた。これらすべては彼らからすれば極めて親切である。しかし彼らは、自己の提案により私を死ぬほど苦しめているのである。今は私はこれらすべてについて考えざるを得ない。しかし主の意思を信頼しながら。彼は、私に対して何を企てるべきかを確実に示すのである。」

皇太后の安全の足元が明白に崩れだす。12月3日、白軍の指導者ドラゴミロフ（Драгомиров, Владимир Михайлович）から、皇太后は、当地から去る方がよいという書簡を受けて衝撃を受ける。「12時にソーニャが夫と来た。彼は私に自己の書簡を読み始めた。私は彼に対して、ドラゴミロフに手紙を書くように求めている。当地における私の滞在により、軍は当惑しているのかどうか、彼らは私に対して保証を与えることができるかどうかを知るためである。返事には、私が去った方がよいと述べられていた。これは私には重大な打撃であった。彼は、際限なく忠実な人間であり、私が頼ることができる人物であり、私を魂の底まで揺さぶった。」

12月11日、さらにイギリスのアレクサンドラ王太后からの電報を受け取る。皇太后の心は動くが、やはり拒否する。「彼女は、私が彼女のところに移るようにまたぞろ主張している！これは何と痛く苦しいことか。なぜならば私はとても喜んで彼女のところに行くのだが。しかしそれは今ではないのである。彼女に対してすべてのことを書いた。自分の感情を説明しようと努めた。」

すでに、事態の悪化のために、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は子供を連れてクリミアを去った（12月13日）。もっとも彼の妻のクセニアはとどまる。次女のオリガもクリミアを去り、カフカスに向かう意向であ

り、1919年初頭には出立した。

このような状況において、皇太后は何にこだわってクリミア出発を拒否していたのか。息子のニコライ一家の生存を信じて、近いところにとどまることを望んだとしか考えられない。

出国を拒否する皇太后が折れたのは、1919年4月であった。英艦マールボロのチャールズ・ジョンソン大佐が、状況の悪化を粘り強く説いて皇太后を説得した。この時ドイツに代わってクリミアに入ったフランスも撤収し、ポリシェヴィキのクリミア進軍が予期された。4月11日、皇太后一行を乗せたマールボロはヤルタを出港した。その後皇太后はイギリスとデンマークで亡命者として余生を過ごすことになる（1928年没）。

※結びに代えて

マリア皇太后の日記は、基本的には日常の身の回りのことを綴った非政治的な内容が大半である。それにも関わらずその政治的側面に注意を向ければ、この期間において、皇太后が真正面から行動したのは、1915年におけるニコライ2世の軍総司令官就任に反対したことだけであると断言できよう。大戦の推移がロシアにとって不調であるときに、ニコライ2世がこのようなリスクを冒すことがロシアのため帝室のために賢明ではないこと。就任決定の背後にアレクサンドラ皇后、さらにはラスプーチンの影響力が見えると捉えられるということが主たる反対理由であった。これは妥当な判断である。しかしニコライ2世は、皇太后の助言を容れずに司令官に就任した。こののち皇太后は政治的な動きを求められてもかたくなに拒んでいる。

1916年に皇太后が首都からキエフに移住したのは、何か積極的な政治的な理由があるわけではなく、赤十字活動や娘の活動支援のためであり、またラスプーチンなどの噂が流れる首都の生活を嫌ったためと思われる。

1916年秋に、大公たち、とりわけニコライ・ミハイロヴィチ大公が、ニコライ2世に対して、アレクサンドラ皇后の政治介入をやめさせ、ドゥーマの信頼を得た政府を作るよう諫言した時、皇太后は彼らの行動を支持し

て期待を寄せはしたが、自らは積極的に動かなかった。

その後ラスプーチン殺害の混乱の中、大公たちから、皇太后自ら首都に向かい、皇帝を説き伏せるよう期待されたが、皇太后は辞退した。自らの行為の無益さを理解していたこと、ニコライを直接的に苦しませる行為をすることは自ら感情的に耐えられないことなどが理由と考えられるであろう。

この時期の皇太后の動きに、すでに述べた以上の政治的な意義を認めるということは、日記を見る限りにおいては、あまり妥当とは言えないであろう。ユスポフ公爵が伝えているところの、ニコライ2世に対して「私かラスプーチンを選びなさい。ラスプーチンが退けられないのであれば、私はペトログラードを去ります」と皇太后が面罵したという記述が、皇太后の政治的意思の表れであると引き合いに出されることがある。しかしながらこれは、皇太后が唯一明示的に政治的行動をした、すなわちニコライ2世の総司令官就任反対したことに関係しているものであり、なんとしてもラスプーチンを排除するという強い意向を表しているのではないと推測できる。

さらに、革命前においてニコライ2世を退位させて、ミハイル大公に摂政を務めさせる運動に皇太后が関与していたとささやかれることがあるが、日記の中をつらぬいている皇太后の思想と行動とはそぐわないものであり、関係者の皇太后に寄せる期待の表れにすぎないと考える方が適切であろう¹⁷⁾。

17) Coryne Hall, *Op. Cit.*, p.267.

ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争(2)

山 口 悟

Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (2)

YAMAGUCHI SATORU

目 次

はじめに

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

B. デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

2. ジウトランド海戦とジウトランド論争

A. ジウトランド海戦の概要

B. ジウトランド論争

(以上『国際学論集』第30巻、第1・2合併号、2019年12月掲載)

3. 「海軍幕僚評価」

A. 艦隊決戦の戦略的意義

B. ジウトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

おわりに

(以上本号)

3. 「海軍幕僚評価」

海軍省の公式記録として公表された『ジウトランド海戦報告』は、「海軍幕僚評価」の部分削除および修正版といえるものである。その修正作業を担ったポーレン少佐〔退役〕には批判や論評の部分の消去が命じられており、「海軍幕僚評価」のうち、第1章「1916年の状況」、第2章「1916年5月の大艦隊海戦要務令」、第8章「午後6時15分の艦隊展開についての所見」は全部削除され、海軍省の暗号解読部門である第40室（Room 40）の通信傍受に関わる部分など機密上、非公表とすべきと考えられた箇所も削除されている⁹⁵⁾。その他にも削除部分は数多くあり、また残存部分でも文章の修正がいくらかみられるが、基本的に『ジウトランド海戦報告』には「海軍幕僚評価」の文章が損なわれずに残されている。

「海軍幕僚評価」の本体部分の構成は以下の通りである⁹⁶⁾。

序論（Introduction）

第1章 1916年の状況（The Situation in 1916）

第2章 1916年5月の大艦隊海戦要務令（The Grand Fleet Battle Orders of May, 1916）

第3章 海戦までの動き、5月28日～30日（Preliminary Movements, May 28-30）

第4章 午後3時40分から午後4時40分までの巡洋戦艦隊の戦闘（The Battle Cruiser Action from 3.40 pm to 4.40 pm）

第5章 ドイツ大海艦隊出現。午後4時40分から午後5時40分までの戦闘（German Battle Fleet in Sight. The Action from 4.40 pm to 5.40 pm）

第6章 午後2時から午後5時までの大艦隊司令長官の状況認識（Commander-in-Chief's View of the Situation, 2 pm to 5 pm）

95) NSAJ, pp. 6-8, 38-39, 45, 119-121, 132-33. 通信傍受の機密保持のための配慮は、コーベットの『海軍作戦』第3巻〔初版〕においても同様である。

96) NSAJ, p. 2. 全削除となった第1、2、8章を除いたものが、そのまま『ジウトランド海戦報告』の章立てとなる。

第7章 司令長官と巡洋戦艦隊の接触、午後5時35分から午後6時15分
(Commander-in-Chief in touch with Battle Cruiser Force, 5.35 pm to 6.15 pm)

第8章 午後6時15分の艦隊展開についての所見 (Remarks on the Deployment at 6.15 pm)

第9章 最初の半時間、午後6時15分から午後6時40分 (The First Half Hour, 6.15 pm to 6.40 pm)

第10章 第2の交戦とシェーアの退避。南東および南への回頭 (The Second Engagement and Scheer's Turn Away. The Turn to South-East and South)

第11章 夜戦の展開 (Proceedings during the Night)

第12章 水雷戦隊の夜間戦闘 (Destroyer Actions during the Night)

「海軍幕僚評価」では、ジウトランド海戦に関連する各種の批判、たとえば、戦艦隊と巡洋戦艦隊の間の当初の距離が大きすぎて両隊の協働に不利だったこと、海軍省によるハリッジ部隊 (Harwich Force) の控置や、その敵情報取り扱いの不備と過度な情報秘匿主義への批判等が削除部分において数多く散見される⁹⁷⁾。以下においては、デュワーの海軍についての考察と主張にも留意しつつ、批判を多く含む削除部分に注目して「海軍幕僚評価」の内容をみてみたい。

なお、デュワー兄弟の手になる「海軍幕僚評価」であるが、そこに兄アルフレッド独自の見解があるか否かは判じがたい。その内容から判断して、弟ケネスの海軍についての考察と主張が「海軍幕僚評価」において全面的に展開されていることはまちがいない。また、1924年に『海軍評論』にて掲載されたアルフレッドによる『海軍作戦』第3巻についての書評が「海軍幕僚評価」の内容を踏まえたものであることから、少なくとも兄アルフレッドも弟ケネスと同様の見解を有していた、もしくはそれに全面的

97) NSAJ, pp. 40-43, 132-33. ハリッジ部隊は、英仏海峡防衛のためハリッジに置かれた、軽巡洋艦や駆逐艦等で編成された部隊である。

に同意していたと考えられる⁹⁸⁾。ケネスによる自伝等の著作から考えると、やはり海軍に関する専門的知見の深い彼の見解が「海軍幕僚評価」には直接に大きく反映されているとするのが自然かと思われる⁹⁹⁾。

「海軍幕僚評価」の「序論」も『ジュトランド海戦報告』へと修正されるにあたって大幅な削除を被る部分であるが、削除となるその最終部分において、この評価報告が特に幕僚将校による利用とその教育を目的として作成されたものであり、彼らの将来の指針と研究のための教訓を演繹しようとする努力の表れであると記されている。また、海軍に関してきわめて興味深く永続的な二つの主題として、「海軍戦術の適切なシステムと、参謀の働きと指揮統制の適切なシステム」があげられている¹⁰⁰⁾。この「序論」部分からみても、ケネス・デュワーの海軍についての考察や主張が「海軍幕僚評価」に強く反映されていること、またそれを積極的に表現しようとする彼の姿勢がよく感じられるといえよう。

A. 艦隊決戦の戦略的意義

全削除された第1章「1916年の状況」では、敵艦隊を封じ込めるだけでは不十分であり、艦隊決戦による敵艦隊撃滅の必要性が強調されている¹⁰¹⁾。艦隊決戦の重要視、つまり大海艦隊撃滅の重要視は、大海艦隊の戦略的重要性の認識と表裏一体をなす。

大海艦隊はバルト海とヘリゴランド湾（Heligoland Bight）の制海権を

98) [Alfred Charles Dewar], "Naval Operations of War, vol. III. The Battle of Jutland," *The Naval Review*, 12-2 (May 1924). この書評は、作者名が付されていないが、アルフレッド・デュワーの著したものであり、「海軍幕僚評価」と内容的に重なるものである。

99) ケネス・デュワーが兄アルフレッドに補助されて「海軍幕僚評価」の編集作業にあたった、とハーバーが述べている文書もある。やはり、弟ケネスが主編者との認識があったのではないだろうか。John Ernest Troyte Harper, *Facts Dealing with the Compilation of the Official Record of the Battle of Jutland, Part II, 1928*, in *The Jellicoe Papers; Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Jellicoe of Scapa* (hereafter cited as *JP*), vol. 2, ed. Alfred Temple Patterson (London: Navy Records Society, 1968), vol. 2, p. 482.

100) NSAJ, p. 11.

101) NSAJ, p. 12.

有して、大きな戦略的影響を及ぼしていた。そのバルト海の制海権は、対独封鎖への障害をなし、またスウェーデンからの鉄鉱石輸入などドイツの戦略物資調達を支えるだけでなく、ロシアと連合国との海上連絡線を阻害している。さらにヘリゴランド湾の制海権は、そこをドイツ潜水艦に利用可能とさせて、その通商破壊戦展開の基礎ともなっていた¹⁰²⁾。

甚大な被害をもたらすドイツ潜水艦を抑え込むためには、エルベ川などドイツの河川近辺とカテガット (Kattegat) 海峡狭隘部の機雷などによる封鎖が望ましいが、ドイツの掃海作業を支援する大海艦隊の存在がその実現の妨げとなっていた。さらに大海艦隊の存在は、駆逐艦戦力を艦隊任務に必要とさせて、その船団護衛と対潜作戦への十分な投入を妨げ、またイギリス本土への攻撃に備えて大規模な陸上部隊を本国に必要とせしめた¹⁰³⁾。

つまり大海艦隊の決定的撃破は、バルト海への海軍部隊派遣と対独封鎖の強化を可能とするだけではなく、援助の道を開いてロシアを支えることをも可能とする。それはまたカテガット海峡とヘリゴランド湾の封鎖を可能とするので、ドイツ潜水艦の活動を封殺でき、通商破壊戦の抑止にもつながるのである。大海艦隊が無力化すれば、海軍の過大な負担が軽減され、艦船建造も停止でき、大陸での陸上戦に戦力・資源を集中することを可能として、大戦の早期終結をもたらしただろう¹⁰⁴⁾。だからこそ艦隊決戦である。

通商破壊戦対策等への配慮から艦隊任務のみに集中できない状態で、しかも優勢なイギリス艦隊との決戦を劣勢のドイツ艦隊が基本的に避けるという状況下に艦隊決戦を生起させるためには、大艦隊がドイツ潜水艦に効果的に対応することによって大海艦隊をドイツ潜水艦支援に赴かしめる必要がある。ドイツ潜水艦に対してイギリスが駆逐艦などで対抗すると、ドイツは軽巡洋艦で対抗し、さらにイギリスは船団護衛に戦艦もしくは巡洋戦艦を派するという具合に事態が拡大した末、最後には大海艦隊のノル

102) NSAJ, pp. 12-15.

103) NSAJ, pp. 14-16.

104) NSAJ, p. 17. cf. Dewar, *Navy from Within*, p. 269.

ウェー沖への出撃に至った1918年4月の事例がこの説の証左である¹⁰⁵⁾。こうした通商破壊戦対策と艦隊戦の相関関係をみすえての方策は、大戦の前半2年間には採られていなかった¹⁰⁶⁾。

艦隊決戦の実現は、敵情報の通信傍受により生じた好機に即応できる状態に大艦隊を保ち続けることによって追求された。これには通商護衛任務などへの割当戦力減少が伴うので、なおさらに一撃で大海艦隊を撃滅するべく、決戦思想と精力的な戦術攻勢が必要だったのである¹⁰⁷⁾。

以上のような「海軍幕僚評価」における艦隊決戦の戦略的意義の叙述は、ハーバー・レコードにも、そしてこの部分の全面削除のために『ジュトランド海戦報告』にも存在しない「海軍幕僚評価」の特徴的かつ興味深い部分である。第1章の削除は、それがデュワールの戦略観の全面的提示部分であるがゆえに理解できるが、それはまた、艦隊決戦勝利の戦略的影響の大きさを述べることで、その勝利を実現できなかったジェリコーへの批判にもつながると認識されたためかもしれない。

海軍省の公式記録となった『ジュトランド海戦報告』の原版である「海軍幕僚評価」において、艦隊決戦による大海艦隊撃滅の戦略的価値が重要視されたことは、それが海軍省の公式見解であったことを示しているといえよう。この艦隊決戦についての海軍省の認識は、『海軍作戦』第3巻を著述したコーベットの認識とは異なっていた。海軍史家・戦略家として著名なコーベットは、第一次世界大戦以前に軍令部長を務めて海軍改革を主導したジョン・フィッシャー（John Arbuthnot Fisher）に近い位置にあって、その戦略立案に協力するなど、イギリス海軍に大きな影響を与えてきた人物である¹⁰⁸⁾。彼の戦略思想にはマハン（Alfred Thayer Mahan）と違っ

105) 1918年4月の大海艦隊の出撃については下記を参照。Marder, *FDSF*, vol. 5, pp. 145-56.

106) NSAJ, pp. 17-18.

107) NSAJ, p. 18.

108) コーベットについては下記を参照。ジュリアン・スタフォード・コーベット [エリック・J・グロウヴ編集] 『コーベット海洋戦略の諸原則』矢吹啓訳（原書房、2016年）。ジェフリー・ティル「コルベットとイギリス流の海戦方法—効果と実行

て艦隊決戦の価値を極大視しない特徴があり、この点は海軍の中に反発もあって、デュワー兄弟も批判的だった¹⁰⁹⁾。「海軍幕僚評価」の第1章冒頭部分では海軍戦略における艦隊決戦の効用を過小評価する考え方が非難されているが、これはコーベットへと向けられたものであろう¹¹⁰⁾。また『海軍作戦』第3巻は、ジュトランド海戦でのジェリコーの指揮に理解を示す一方で、巡洋戦艦隊の戦闘には批判的と思われたがゆえに、ビーティー以下の元巡洋戦艦隊首脳が中心を担っていた海軍省の反感をかうことにもなった¹¹¹⁾。このコーベットへの反発が、『海軍作戦』第3巻の刊行に際して、海軍省が先述の但し書きをわざわざ挿入させることにつながった。

コーベットは、戦闘可能時間の短さと海軍省の敵情伝達の不適當ゆえに、ジュトランド海戦において大海艦隊撃滅をなすためにジェリコーが史実以上にできたことはなかったと考えていた¹¹²⁾。さらにコーベットは、デュワーと違って、海上優勢が維持されているのであれば海戦の勝利は決定的な問題とはならないので、ジュトランド海戦とジェリコーを好意的に評価していた。彼が1922年の講演の最後で述べた、「トラファルガー海戦が与えて、ジュトランド海戦が与えなかった重要な利益とは何なのであろうか」との一節は、両海戦の結果が同様なものであったとの見解を示唆し

にまつわる諸問題」(立川京一、石津朋之、道下徳成、塚本勝也編著『シー・パワー—その理論と実践—』芙蓉書房出版、2008年)。アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史：ジュリアン・コーベット、海軍士官教育、そして国家戦略」矢吹啓訳(『戦略研究』8、2010年)。

109) Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 50-59; idem, *The Education of a Navy: The Development of British Naval Strategic Thought, 1867-1914* (London: Cassell, 1965; Malabar, Florida: Robert E. Krieger Publishing, 1984), pp. 178-79, 183.

110) NSAJ, p. 12.

111) Chatfield to Keyes, Jan. 1923, in *The Keyes Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Baron Keyes of Zeebrugge* (hereafter cited as *KP*), vol. 2, ed. Paul G. Halpern (London: George Allen & Unwin, 1980), pp. 85-87; Corbett to Jellicoe, 3 Aug. 1922, and Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, in *JP*, vol. 2, pp. 415, 437, and 438-39; Lambert, "Writing the Battle," pp. 187, 190; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 192.

112) Corbett to Jellicoe, 19 June 1922, in *JP*, vol. 2, p. 414.

ている¹¹³⁾。これは「海軍幕僚評価」の最終部分において、「大勝利であっても、我々が有するもの以上のものは与えられなかっただろうといわれている。これは海戦についての説得力なき論評である」、とデュワーが批判している見解であろう¹¹⁴⁾。

『海軍作戦』第3巻の書評でアルフレッド・デュワーは、「海軍幕僚評価」の内容を踏まえて『海軍作戦』第3巻を批判し、コーベットの著述がジウトランド海戦の不満足な展開の原因について批判的考察をもたらさないことに失望したと述べている¹¹⁵⁾。弟ケネス・デュワーも、『海軍作戦』第3巻について、コーベットが親ジェリコー・反ビーティーの偏見をもっており、海洋戦争の専門技術的側面に無知でもあると批判し、自身としてはジウトランド海戦についてのコーベットの見解になんらの重要性もみとめていないが、残念ながら一般大衆はそうではないだろうと不満を述べている¹¹⁶⁾。また、のちに彼は自伝において、『海軍作戦』第3巻も『ジウトランド海戦報告』も「海軍幕僚評価」から派生したものだが、前者を称賛して後者を非難する者は歴史について何も知らない者だと述べている¹¹⁷⁾。

実際にコーベットは『海軍作戦』第3巻の執筆にあたって「海軍幕僚評価」に接していたが、それについて大いに否定的であった。彼は「海軍幕僚評価」を評して、事実の提示には欠点 (faulty) が多く、ジウトランド海戦を検討すればするほどデュワーによる叙述がおかしく (grotesque) 思われ、それを幕僚による報告書 (Staff Account) とよぶのは悪い冗談で

113) Julian Stafford Corbett, "Napoleon and the British Navy after Trafalgar," *The Quarterly Review*, vol. 237-471 (Apr. 1922), p. 255; Andrew Lambert, *21st Century Corbett: Maritime Strategy and Naval Policy for the Modern Era* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2017), p. 146; idem, "Writing the Battle," pp. 188-91, 194; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

114) NSAJ, p. 144; Lambert, "Writing the Battle," pp. 183-84.

115) [Alfred Dewar], "Naval Operations of War," pp. 286-87, 299-300.

116) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, pp. 88-89.

117) Dewar, *Navy from Within*, p. 266. コーベットは『海軍作戦』第3巻の執筆に際し、1922年はじめの時期に「海軍幕僚評価」を受け取っていた。Lambert, "Writing the Battle," p. 184.

しかないとまで酷評している¹¹⁸⁾。コーベットはジェリコーと親しく、『海軍作戦』第3巻の叙述に際してもジェリコーの助言を得ており、「海軍幕僚評価」への反感は両者に共通するところであった¹¹⁹⁾。

フィッシャー、そしてその協力者であったコーベットは、ドイツにとって戦略的に重要な海域であるバルト海へ圧力をかけ、その脅威により大海艦隊を決戦に誘引して撃滅し、対独封鎖をより強固にして、大戦の早期勝利を図るという戦略構想を抱いていた¹²⁰⁾。コーベットにとって、徴兵制に支えられた巨大な陸軍が大陸で戦うというドイツ式戦争法の採用はまちがいであり、それまでの歴史で実践されてきた、大陸で同盟国が戦う一方で、それを支援するイギリスは海洋から水陸両用作戦も駆使して敵を脅かすという、いわゆるイギリス式戦争法（the British Way in Warfare）こそが正しきものであった¹²¹⁾。

実際にはチャーチルの主張によってダーダネルスへの攻撃作戦が採用され、必要な諸資源が浪費されたためにバルト海方面への作戦は実現されなかったが、バルト海の重要性を認識する点で、コーベットとデュワーの戦略観は近いものであった¹²²⁾。両者の差異は、バルト海に踏み込もうとする姿勢を呈して艦隊決戦を強要するか、艦隊決戦に勝利してバルト海に踏み込むか、という順序の点であったともいえる。しかし、大戦前に長らく海軍を支配したフィッシャーに対し、デュワーは多くの点で反感を覚えており、そのバルト海作戦構想も無謀な考えだと批判している¹²³⁾。フィッ

118) Corbett to Jellicoe, 10 Mar. and 18 July 1922, in *JP*, vol. 2, pp. 413, 414-15.

119) 拙稿「ジウトランド論争とジェリコー」、18～19頁。

120) コーベットとフィッシャーのバルト海攻撃構想については下記を参照。Andrew Lambert, "An Edwardian Intellectual at War: Julian Corbett, and the Battle for British Strategy," in *Jutland, History, and The First World War*, ed. David Gethin Morgan Owen, Corbett Paper, No.18 (King's College London, 2017); Andrew Lambert, "The Possibility of Ultimate Action in the Baltic: The Royal Navy at War, 1914-1916," in *Jutland: World War I's Greatest Naval Battle*, eds. Michael Epkenhans, Jörg Hillmann and Frank Nägler (Lexington, Kentucky: University Press of Kentucky, 2015).

121) Lambert, "Writing the Battle," p. 179.

122) *Ibid.*, pp. 184-85.

123) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, pp. 88-89; Dewar, *Navy from Within*, pp. 101-102, 103, 105, 109-110, 117-19, 144-45, 188-89, 208-209, 242, 356.

シャーのグループ（Fishpond）の代表的人物がジェリコーであり、コーベットであるとすれば、デュワールの経歴を顧みたとき、それまでの海軍の在り方に批判的な彼がコーベットに反発を覚えて批判する立ち位置も理解できるところではある。

B. ジュトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

全削除となった第2章「1916年5月の大艦隊海戦要務令」では、19世紀以降のイギリス海軍の戦術思想が概観された後に、ジュトランド海戦当時の大艦隊海戦要務令（Grand Fleet Battle Orders）の内容が批判されている。

ナポレオン戦争終結後に平和が続くなか、真の意味での海軍戦術は絶え、戦術的効用を無視した、隊形維持と秩序だった航行にきわめて執着する艦隊運動（quadrille-like movements）が墨守されるようになった。それに伴い過度の中央統制が指揮形態の特徴となり、そうした形式に順応した自発性の低い将校がつくられていくことになった。第一次世界大戦を前にした時期に戦術思想の変革は進んでいたものの、戦術問題を扱える参謀組織もなく、海軍大学では指揮統制の原則や戦術の研究に必須の戦史研究が軽視されていた。こうして大戦勃発時には、包括的な戦術原則は存在しなかった。ジュトランド海戦当時の大艦隊海戦要務令は、大戦勃発後に形成されていったものである¹²⁴⁾。

「海軍幕僚評価」での大艦隊海戦要務令への批判は、概ね以下の点に要約される。

i) 防御偏重¹²⁵⁾

大艦隊海戦要務令の内容は基本的に防御偏重であり、特に水雷兵器に対

124)NSAJ, pp. 18-20. cf. Bertram Home Ramsay, Lecture - Jutland I, Grand Fleet Battle Instructions, at the Royal Naval College, Greenwich, 14 June 1929 (delivered), pp. 3-4, Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030.

125)NSAJ, pp. 21-22, 24, 26-29, 33-36.

する警戒が過剰である。砲戦で敵を撃破するまでは、水雷攻撃対策のため敵艦隊との間に安全な距離をとり、また敵の魚雷攻撃には退避で対応するとされている。敵に誘引されて水雷兵器による待ち伏せ攻撃を受けることを警戒して、積極的追撃も否定されている。

戦艦隊による砲戦が勝敗を決するとの大前提のもとで、戦艦以外の艦種の役割は戦艦隊の防衛とされ、軽艦艇による魚雷攻撃も防御任務より優先順位が下位であるとされた。軽艦艇も有効に使われるべきであるのに、防御偏重の姿勢はその部隊指揮官の行動を抑制して消極的なものとし、主導権と奇襲効果を敵に明け渡している。

潜水艦はその性能から艦隊戦に影響を与えがたく、それは機雷も魚雷も同様であった。さらに実際には魚雷面でもイギリス艦隊は劣勢ではなかった。たとえ英側が魚雷において劣勢だったとしても優勢な砲戦力で補えばよく、ためになお積極的な攻撃姿勢が重要であって、魚雷からは退避するという消極的姿勢は敵艦隊撃滅を困難にする。

ii) 敵艦隊と並航する長大な単縦陣による遠距離砲戦という戦闘想定¹²⁶⁾

大艦隊海戦要務令では、長大な単縦陣を組み、両艦隊が並航して遠距離砲戦をおこなうという基本的想定がなされている。しかし、期待通りの戦闘形態を劣勢な敵艦隊がとるはずはなく、実際にジウトランド海戦でも大海艦隊は離脱を図った。しかも大艦隊海戦要務令には、必要となるであろう追撃戦についての記載はない。漫然とした遠距離砲戦ではなく、敵戦力の一部を戦力集中した優勢な部隊で攻撃することから敵艦隊全体の崩壊をもたらし、その撤退を阻止することが肝要である。

iii) 過度の中央統制と分艦隊戦術の不可能¹²⁷⁾

敵の一部を優勢な戦力で攻撃して、そこから全体的勝利をつかむという分艦隊戦術が必要であり、それは魚雷への対応面でも有用である。しかし、指揮の中央統制が強いために下級指揮官の裁量の余地は主に防御行動

126) NSAJ, pp. 21, 23, 25-26, 31-32.

127) NSAJ, pp. 21-23, 25-26, 31-33.

に限られ、また彼らに自発性がないため事態に即応できない。

大艦隊海戦要務令はいかに行動するかを細かく規定しすぎているが、それは予測不能の事態が起こりがちな戦場では適切ではない。下級指揮官の自発的行動と、その行動が基づくべき概括的な作戦指示が必要なのである。ジウトランド海戦で指揮統制は信号書と詳細な計画のみに基づいていたが、明確で簡潔かつ広範囲な司令長官の作戦意図が示され、それを体した下級指揮官が練達の判断と自発的行動をなしうる作戦指揮がおこなわれるべきだった。

「海軍幕僚評価」で第3章より後に位置する実際の海戦展開を扱った部分においても、上記のような大艦隊海戦要務令に内在する傾向や性質への批判、つまり、単縦陣で敵艦隊と並航して砲戦するとの前提、大量の信号発信に依存して下級指揮官の裁量を認めずに分艦隊戦術を不可能とする過度の中央統制、防御偏重と下級指揮官の積極性・自発性欠如、戦闘序列維持に固執する硬直した戦闘形態、特に水雷兵器への過剰な警戒等々への批判が各所にみられる¹²⁸⁾。また、情報を適切に扱うべき幕僚面での不備も指摘されている¹²⁹⁾。

最終の第12章では夜戦を担った水雷戦隊の戦闘を取り扱っているが、ここでの批判点も数多く、敵情報や司令長官の意図などが下級指揮官、部隊間に共有されていないために敵味方の識別に障害が生じたこと、水雷戦隊の受動的・消極的な部隊行動、その敵情報告の不足などが挙げられている¹³⁰⁾。

128) NSAJ, pp. 89-91, 95-97, 98-99, 105-107, 121-22.

129) NSAJ, pp. 124-25, 130.

130) NSAJ, pp. 134, 138-39, [140], 141, 144; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 201-202. 大英図書館所蔵ジェリコー文書第54 [Jellicoe Papers, vol. 54, Add MS 49042] 所収の *Naval Staff Appreciation of Jutland (with Appendices and Diagrams)*, No.7のデジタル史料では140頁が欠落している。

http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=add_ms_49042_fs001r

大艦隊海戦要務令においては明確かつ包括的な敵情報告の必要は明示されておらず、これも海戦での敵情報告不足の一因であったのかもしれない。Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 522.

「海軍幕僚評価」で批判されるように大艦隊海戦要務令においては、たしかに損害回避を重視して防御面に、特に水雷兵器に対する警戒に重点が置かれていたことは否定しがたい¹³¹⁾。この背景には、英帝国生存の支柱である大艦隊の戦力保持を極めて重視するジェリコーの戦略観が存在していた¹³²⁾。また、水雷兵器への強い警戒姿勢には、大戦勃発後に軽巡洋艦や駆逐艦戦力が不足していたこと、水雷兵器をもつての近代戦が初めての経験であったこと、それに慎重なジェリコーの性格も影響していたといえる¹³³⁾。ただし、水雷兵器への懸念は広く海軍内部で共有されていた感覚であり、ジェリコーの個人的見解のみに帰されるべきものではない¹³⁴⁾。

水雷兵器への恐れとイギリス側の砲戦力優勢との判断は、戦艦隊の遠距離砲戦を戦闘の基軸とすることにつながった。これには砲術専門というジェリコーの経歴とそこから培われた戦術面での思考の傾きも影響していたかもしれない¹³⁵⁾。この戦艦隊への偏重が、水雷戦隊を主に防御的役割へ追いやり、その結果として敵への打撃を減じることにも通じたといえる¹³⁶⁾。

「海軍幕僚評価」では単縦陣批判と分艦隊戦術の利点の強調がなされているが、分艦隊戦術は大戦前に本国艦隊で一時検討・試行されたことがあったものの、当時、海軍で一般的に受容されていたのは単縦陣戦術であった¹³⁷⁾。このため海軍内部でも、それへの批判が士官の教育用資料であ

131) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 98-105, 109, 522.

132) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 5-6.

133) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 99, 105, 521, 546; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 264.

134) Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 102; Shleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 257-59.

135) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 18, 30-31.

136) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 527-28, 547; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 24-25, 30-31.

137) Dewar, *Navy from Within*, pp. 123-24; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 28; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 11-13. 1911年に本国艦隊司令長官メイ (William Henry May) 大將は、参謀であったリッチモンドの促しもあって分艦隊戦術を試行した。また、第一次世界大戦勃発時まで本国艦隊司令長官であったキャラハン大將も、下位指揮官の自発的指揮の重要性を認識していたようである。cf. Christopher M. Buckley, *Genesis of the Grand Fleet: The Admiralty, Germany, and the Home Fleet, 1896-1914* (Annapolis MD: Naval Institute Press, 2021), pp. 185-94; Dewar, "Battle of Jutland," I, pp. 403-404.

る「海軍幕僚評価」に存在するのは不適切との意見や、分艦隊戦術への批判的見解も存在していた¹³⁸⁾。ジウトランド海戦に限って考えても、視界状態の悪さゆえに分艦隊戦術の適用は非常に困難であっただろう¹³⁹⁾。

デュワーと同じく、海軍において分艦隊戦術を提唱した例外的人物が、ジウトランド海戦で第4戦艦戦隊を率いたスターディー中将である。その意見を彼は1915年から翌年にかけてジェリコーに訴えたが、退けられている¹⁴⁰⁾。大艦隊海戦要務令に規定された戦術の変更に対するジェリコーの反対には、いつ大海艦隊との艦隊戦が生起するか不明な状況下に新戦術を採用しても、それに習熟する時間的余裕などありえないため、かえって戦闘能力を阻害することになりかねないという懸念も背景に存在していたようだが、ひとたび規定された戦術原則の変更を嫌うジェリコーの性格も影響していたことだろう¹⁴¹⁾。

大艦隊海戦要務令は、彼が本国艦隊第2戦隊司令官を務めていた1912年

138) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, and, Memorandum by Keyes DCNS and Chatfield ACNS on the Naval Staff Appreciation, 14 Aug. 1922, in *BP*, vol.2, pp. 454, and 455; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 12-13, 14-15.

ジェリコー文書所収の「海軍幕僚評価」の遊び紙に貼付された紙片には、「海軍幕僚評価」における分艦隊戦術の主張への批判がタイプ打ちされた文章で記されている。「海軍幕僚評価」の余白部分と見返し部分には、ドレイヤー (Frederic Charles Dreyer) による書き込みが多く残されており、上記紙片文章も彼の手によるものだろうか。なお、彼の書き込みの中には、「ばかな (Rubbish)」という語も散見される。NSAJ, pp 19, 23, 49, 81, 85, 106, 122; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 297.

他にも分艦隊戦術に批判的な者として、たとえば、オールサム (Edward Altham) 大佐〔退役〕があげられる。Joseph Moretz, *Thinking Wisely, Planning Boldly: The Higher Education and Training of Royal Navy Officers, 1919-1939* (Solihull, West Midlands, England: Helion, 2014), pp. 73-74.

139) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 125-26; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 259-60, 297.

140) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 31-33; Stephen McLaughlin, "Equal Speed Charlie London: Jellicoe's Deployment at Jutland," *Warship 2010*, eds. John Jordan and Dent Stephen (London: Conway, 2010), p. 134. スターディーの下で第4戦艦戦隊第3戦艦隊を率い、副司令官を務めたダフ (Alexander Ludovic Duff) 少将も、スターディーの戦術見解に同意していた。

141) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 31, 33.

に作成したものをもとに大戦勃発後に作り上げていった、まさにジェリコーの戦術構想の統合体といえるものであった¹⁴²⁾。それは開戦直後の3頁の覚書から1915年12月までに75頁もの大分量に拡張されていくが、当然そこには作り手の性格や姿勢が投影されていた¹⁴³⁾。先述のように大艦隊海戦要務令における防御面への傾斜もその表れであるが、同様に責務を分担しようとしないう彼の性格や姿勢が、強い中央統制という大艦隊海戦要務令の特性にも結びついていたといえよう¹⁴⁴⁾。もっとも、過度の中央統制は、デュワーの考察にも表されているように、海軍全体の特性であった。「中央統制は海軍の指揮統制の固有部分となっていた。それは80年代と90年代のほぼすべての海軍士官の骨にまで染み入り、その後の世代の艦隊司令官たちに深く浸透していた」のである¹⁴⁵⁾。その特性は大艦隊海戦要務令の多数の規定を産むことにつながり、その分量の大きも「海軍幕僚評価」において批判される場所であった¹⁴⁶⁾。

大艦隊海戦要務令は、過度の中央統制が単縦陣戦術、下級指揮官の指揮権限の不十分、彼らの低い積極性・自発性、分艦隊戦術の実施困難と相互に関連しているとのデュワーの批判点をまさに具現化したものといえた¹⁴⁷⁾。あるいは逆に、「海軍幕僚評価」の作成を通して、デュワーは海軍についての考察を深め、自らの批判や主張を明確化したともいえるのかもしれない。いずれにしても、デュワーにとって、大艦隊海戦要務令に基づいて戦

142) Extracts from Jellicoe's "War Orders and Dispositions. . . Prepared when in [command of] 2nd Division, Home Fleet" (Add. MSS. 49012, ff. 2-16), in *JP*, vol. 1, (London: Navy Records Society, 1966), pp. 23-25.

143) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 251. cf. Extracts from Grand Fleet Battle Orders (Adm. 137/288, ff. 1-39), 18 Aug. 1914, and, Extracts from Grand Fleet Battle Orders in force on the eve of the Battle of Jutland (Add. MSS. 49014, ff. 1-6, 14 and 18), in *JP*, vol. 1, pp. 52-63, and 243-53. また、1914年10月30日付のジェリコーの海軍省宛書簡も当時の彼の戦術観を知る上で重要である。Jellicoe to the Secretary of the Admiralty (Add. MSS. 49012, ff. 23-5), 30 Oct. 1914, in *JP*, vol. 1, pp. 75-77.

144) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 521, 546.

145) NSAJ, p. 32n. 19世紀以来のイギリス海軍の特性とジウトランド海戦の関係については下記が詳しい。Gordon, *The Rules of the Game*.

146) NSAJ, p. 21; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 252.

147) cf. Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 20-23, 30.

われたジュトランド海戦の展開は海軍の諸欠陥を露呈したものに思われ、大艦隊海戦要務令を作成し、ジュトランド海戦で大艦隊を総指揮したジェリコーは、その海軍の有り様の象徴的人物と認識された。

総じて大艦隊海戦要務令は、深刻な損害を避ける点に重きが置かれており、特に戦闘を避けて撤退を意思する敵に対し、どのように対応すべきか解答したものではなかった。しかし、それは最後までジェリコーには解けなかった難問であり、評価すべきところは多々あるとはいえ「海軍幕僚評価」による大艦隊海戦要務令への批判をそのまま受け入れることも難しく、それはジェリコーにとっても酷に過ぎよう¹⁴⁸⁾。

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

全削除となる第8章「午後6時15分の艦隊展開についての所見」では、ジェリコーがおこなった左翼先行展開について以下のように批判している。

右翼先行展開の場合でも、実際にはドイツの魚雷攻撃の脅威は小さなものであって、戦艦隊最右翼に位置して単縦陣先頭を担うことになる戦艦マールバラ（HMS Marlborough）の第1戦艦戦隊第6戦艦隊への危険もそれほど大きくはなく、また第5戦艦戦隊の支援も期待しえた。左翼先行展開では危険は低減するが、少なくともさらに4,000ヤードも敵から離れてしまい、日照時間が限られるなか戦闘可能時間を短縮することになって、決定的勝利の可能性が減じられてしまった。代案として、ジェリコー座乗の総旗艦アイアン・デュークが先頭となる中央部先行展開があり、これは右翼先行展開より安全なうえ、左翼先行展開よりも敵との距離を短縮できる利点を有していた¹⁴⁹⁾。

さらに、第9章の削除部分においても、大艦隊戦艦隊に面した大海艦隊が急反転して一時的に危地を脱することができたのは、大艦隊が大海艦隊を実質的に視認できないほど離れた位置において戦闘隊形へ展開したため

148) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 522, 546-47.

149) NSAJ, pp. 83-85.

でもあると批判されている¹⁵⁰⁾。

「海軍幕僚評価」に散見される点であるが、以上の批判は、戦闘隊形への展開時点における最右翼隊への実際の危険度など、海戦当時のジェリコーが知らなかった事実に基づいており、彼にとって不当なものといわざるをえない。また、右翼先行展開は全部隊の戦闘参入まで30分ほど時間がかかる不利があるだけでなく、なにより大艦隊主力を発見した大海艦隊が艦隊決戦を受け入れるとは想像しがたく、それは最右翼で単縦陣先頭部をなす戦艦マールバラの戦隊を痛打して、すぐにヘリゴランド湾方面へ撤退を図るのではないかと思われる¹⁵¹⁾。ドイツの公刊戦史でさえ右翼先行展開の不利を述べていることから、その危険は明らかであろう¹⁵²⁾。

また、デュワーは、戦闘隊形への展開時に戦艦隊右翼方面にいた第5戦艦戦隊が戦艦隊後尾に続くべく、より敵に近接した位置で旋回しながらも損害軽微だったことから、それと近い位置でおこなわれたであろう主力戦艦隊の右翼先行展開も大きな危険にはさらされなかったはずだと論じている¹⁵³⁾。しかし、その旋回時に第5戦艦戦隊は敵の激しい砲撃を被っており、損害軽微であったのは幸運の作用した面が大きく、危険が少なかったわけでは決してなかった¹⁵⁴⁾。

「海軍幕僚評価」では中央部先行展開が支持されているが、不慣れかつ複雑な艦隊運動を敵前で実行する危険と、司令長官が最も危険な艦隊先頭部に位置することになる不利益にかんがみるなら、それは主張されるほど得策とは思われない¹⁵⁵⁾。実際、海軍部内にも中央部先行展開に対する反論

150) NSAJ, p. 95.

151) McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," pp. 134-35. ジュトランド海戦における戦艦隊の戦闘隊形への展開については、この研究が詳しい。

152) Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 280; Frederic Charles Dreyer, *The Sea Heritage: A Study of Maritime Warfare* (London: Museum Press, 1955), p. 187; Marder, *FDSF*, vol. 3, p. 105.

153) NSAJ, p. 87.

154) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 134-35.

155) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 106-107; McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," pp. 135-37.

はあり、たとえば1929年に海軍大学でジウトランド海戦について講義したラムゼー（Bertram Home Ramsay）大佐は、ジェリコーのおこなった左翼先行展開を支持し、右翼先行展開と同様に中央部先行展開においても生じる危険を指摘している¹⁵⁶⁾。

大海艦隊のドイツ方面への撤退を阻む位置に占位するなど、ジェリコーの左翼先行展開の利は明らかである¹⁵⁷⁾。最良の選択と思える展開をもってしてもなお、劣勢の大海艦隊が撤退を図ることは避けられえず、決定的戦果の獲得はならなかったが、それこそがジウトランド海戦の真実であろう¹⁵⁸⁾。史実以上の戦果の要求はジェリコーにとって実現不可能だったと思われる。

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

「海軍幕僚評価」では、ジェリコーが直接に指揮する大艦隊戦艦隊に関する削除部分、つまりは批判的部分が多数存在するのに対し、ビーティー率いる巡洋戦艦隊への批判はなされておらず、このことから「海軍幕僚評価」における認識の傾きをうかがうことができる¹⁵⁹⁾。巡洋戦艦隊が戦闘を主導したのは海戦の前半部分、いわゆる「南への追撃」と「北への後退」の段階で、「海軍幕僚評価」における第4・第5章の部分であるが、変更部分はあっても第4章での削除部分はほぼなく、第5章でも少ない。つまり、それらの部分は、もとより巡洋戦艦隊への批判を有しておらず、ほとんど修正なしに海軍省公式記録である『ジウトランド海戦報告』に採り入れられたということである。ジェリコー率いる戦艦隊関連の削除部分の多さとの対照は鮮明である。また「海軍幕僚評価」には、ビーティーと巡洋

156) Ramsay, Lecture - Jutland III on the Battle of Jutland, 18 June 1929 (delivered), pp. 29-30, Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030. 彼は、のち第二次世界大戦中の1940年にダイナモ作戦（Operation Dynamo）を指揮してイギリス大陸派遣軍のダンケルク撤退を成功させたラムゼー中将である。

157) 拙稿「ジウトランド論争とジェリコー」（『国際学論集』第25巻1・2号、2014年12月）、9～13頁。Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 279-80; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 105-108.

158) McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," p. 138.

159) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 243-47.

戦艦隊への好評価が感知される表現、たとえば、「しかしながら、ビーティー提督は新たな隊形の重要性をよく理解していた」や、「巡洋戦艦隊は採るべき針路を示した」などという文言が散見され、デュワーのビーティーと巡洋戦艦隊への偏好を感じざるをえない¹⁶⁰⁾。極言するなら、「海軍幕僚評価」はジェリコーを低評価し、ビーティーを高評価するのであった。

ビーティーに偏好した姿勢は、巡洋戦艦隊の失敗に対する不問の姿勢によく表れている。ジウトランド海戦における実際の巡洋戦艦隊の戦闘は、不首尾なものであった。ドイツ巡洋戦艦隊を追撃するイギリス巡洋戦艦隊の艦隊運動は拙く、有効な攻撃態勢の構築に失敗した。巡洋戦艦隊は砲撃配分にも混乱し、砲撃命中率も低く、その速射への偏重は弾薬取扱いの不適當を招いて巡洋戦艦爆沈の誘因になったと考えられる¹⁶¹⁾。また、適切かつ十分な敵情報告を司令長官のジェリコーにもたらしこともできなかった。さらに当時一般的な印象と違って、両艦隊主力の会敵以後のビーティーの行動は、戦闘を求めて勇猛果敢とはいいがたい慎重なものであった¹⁶²⁾。

大艦隊主力から臨時に巡洋戦艦隊へ配属されていた第5戦艦戦隊の用兵にも大きな過失があった。ビーティーは信号連絡の不手際もあって、その戦力の有効利用ができず、苦戦の一因をつくったのである¹⁶³⁾。「南への追撃」では連携不足のため、巡洋戦艦隊は第5戦艦戦隊の強力な支援を適時に受けられず、「北への後退」では、巡洋戦艦隊から遅れ、離されてしまったために第5戦艦戦隊が大損害を出しかねない窮境に陥ることになった。

そうした巡洋戦艦隊の失敗について、「海軍幕僚評価」が批判することはない。自らに都合のよい内容となっているビーティーの報告書に影響されているところもあるのかもしれないが、それにしても戦艦隊への批判との落差は大きいというほかない¹⁶⁴⁾。なお、海戦中の5月31日午後7時ごろ

160) NSAJ, pp. 99, 107.

161) 拙稿「ジウトランド論争とビーティー」、198～200頁。

162) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 533-42, 48; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 68-69.

163) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 482-86.

164) *Ibid.*, pp. 535, 537, 541.

の巡洋戦艦隊による360度旋回の存在の真偽はジウトランド論争の一争点であるが、「海軍幕僚評価」での言及はない¹⁶⁵⁾。のちにデュワーは、巡洋戦艦隊旗艦の巡洋戦艦ライオン（HMS Lion）が360度旋回をなしたか否かの問題など何の重要性もないように思えると述べている¹⁶⁶⁾。

こうしてビーティーと巡洋戦艦隊の失敗が不問に付される一方、ジェリコーとその大艦隊主力たる戦艦隊の行動は厳しい批判にさらされている。先にみた大艦隊海戦要務令への批判は、それを形成したジェリコーへの根本的批判につながる。さらに戦闘隊形への展開をめぐる批判のように、ジェリコー批判は「海軍幕僚評価」において広く展開されており、それら数多い部分が削除されることになった。

ジェリコーの水雷兵器に対する慎重な姿勢は、ジウトランド海戦において、とりわけ31日午後7時20分台におこなわれた雷撃退避に表れた。この慎重な艦隊運動を「海軍幕僚評価」は批判し、敵への追撃を継続すべきだったとする立場を示している¹⁶⁷⁾。また戦艦隊が巡洋戦艦隊の支援に鈍

165) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 142n, 246. 「海軍幕僚評価」の付表34 (Diagram 34: Approximate positions at 6.56PM) に、その暗示はある。

なぜかデュワーは自伝において事実とは逆に、ハーバー・レコードでは2度の半円形旋回がなされたと記されているがビーティーは360度旋回を記憶しているとし、文書資料は決定的ではないものの全体的にはハーバー・レコードの方を支持している、と述べている。Dewar, *Navy from Within*, p. 267. 参照、拙稿「ジウトランド論争とハーバー・レコード」（『国際学論集』第27巻1・2号、2016年12月）、87～88頁。

166) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, p. 88.

167) NSAJ, pp. 106-107. ジェリコーの魚雷退避については下記も参照。Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 511-13, 526-27; Dreyer, *Sea Heritage*, pp. 181-82.

「海軍幕僚評価」では、魚雷に対しては退避（turn away）より対向して進んで回避（turn towards）する方が被雷面を少なくできると述べられている。マードーによると、第一次世界大戦前の演習で両方の魚雷対応策が実践されたが、退避の方がより安全であるように思われた。大戦後にイギリス海軍は魚雷に対して退避が唯一の安全策であるとしたが、1930年代までにはその見解が変化していき、第二次世界大戦中には基本的に対向回避が受け入れられたという。NSAJ, p. 35; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, pp. 36-37n; idem, *FDSF*, vol. 3, pp. 9-10. cf. Extract from Battle Instructions (Dated 1st June 1928), Ramsay's Lectures - Jutland, at the Royal Naval College, Greenwich, June 1929 (delivered), Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030.

かったことも批判されている¹⁶⁸⁾。

「海軍幕僚評価」は、大海艦隊を取り逃がした夜間の大艦隊の動きを「海戦の最暗黒部分」だと酷評している。「戦闘隊形への展開と魚雷攻撃退避は戦術領域の問題であるが、敵の追撃は全く別問題である」とし、積極的に追撃しなかったことを、とりかえしのつかない罪としてジェリコーを強く非難しているのである¹⁶⁹⁾。

「海軍幕僚評価」の「序論」において、ジェリコー座乗の総旗艦アイアン・デュークの信号記録の不備をあげつらい、なんらかの不正行為があったかのような印象を生み出していることなどからみれば、「海軍幕僚評価」のジェリコーへの認識の在り方は明らかである¹⁷⁰⁾。また、「海軍幕僚評価」における批判に、たとえば先述した戦闘隊形への戦艦隊展開時の水雷攻撃の危険度など、当時のジェリコーが知る由もなかった事実に基づいたものがあることも、彼に対する不公平な扱いを感じさせる¹⁷¹⁾。

ビーティーとジェリコーへの認識の大きな差異が、「海軍幕僚評価」には明らかに反映されている。そして、それが大きな反発を招いて、ジウトランド論争の激化に影響することになったのである。

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

デュワーの見解が至るところにみられる「海軍幕僚評価」は、ジウトランド海戦を題材とした彼の主張の結晶体であるといえる。そうであるから

168)NSAJ, p. 110.

169)NSAJ, p. 129.

170)NSAJ, p. 6; Nicholas Jellicoe, *Jutland*, p. 338; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 4.

171)Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 104n, 125-26; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 110n, 115-16.

「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版である『ジウトランド海戦報告』に対してであるが、ジェリコーは、ジウトランド海戦当時の彼には知られなかった事実に基づいての推論が多々なされていると反論している。これに対し海軍省は、事実のみに限定して、推論や解釈は厳しく抑制していると再反論している。*Narrative*, App. G, p. 106.

こそ、当時一般に受容されていた戦術思想に合致せず、また従来のイギリス海軍の有り様の典型ともいえるジェリコーへの批判に過ぎるものとなってしまうのだろう。「海軍幕僚評価」を叙述するデュワーの「精神的姿勢は、事実の公平な評価者というよりも、むしろ検察官のそれであり」、「文書全体を通して、その叙述には明らかな偏見がいきづいており、風刺的な言説や、いくらかの誤った説明につながっている」と観察されるほどであった¹⁷²⁾。信じることを主張するのを躊躇しない彼の性格も、その批判的基調の強化につながったといえよう。

この批判に過ぎる特徴は、「海軍幕僚評価」の配付・公表の中止をもたらした。さらにビーティーを後継した軍令部長マッデンを長とする海軍省は、「海軍幕僚評価」をすべて廃棄することとした。ジェリコーと親しい関係にあったマッデンは、「海軍幕僚評価」に強く反発を感じていた¹⁷³⁾。結局、「海軍幕僚評価」は未公表となり、それゆえイギリス海軍に直接的影響を及ぼせなかった。イギリス海軍がジウトランド海戦の戦訓も踏まえて、のちに指揮における中央統制の緩和等の改革を進めたのは事実であるが、それに「海軍幕僚評価」が直接的貢献をなしたわけではなかった¹⁷⁴⁾。

しかし、批判過多の基調と単縦陣など当時の戦術思想への批判については賛同できないとしつつも、ビーティー軍令部長下の海軍省は、「海軍幕僚評価」の主要結論、つまりジェリコーの不手際により大海艦隊撃滅の好

172) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, in *BP*, vol. 2, p. 454.

173) Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, in *JP*, vol. 2, pp. 437, and 438-39. マッデンは、ジェリコーの義妹の夫にあたり、かつて大艦隊司令長官だったジェリコーの参謀長を務めた人物で、彼と非常に近い関係にあった。

174) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 264-66.

ジウトランド海戦など第一次世界大戦の戦訓のイギリス海軍による受容については下記を参照。Marder, *From the Dardanelles to Oran*, chap. 2; Joseph Moretz, "The Legacy of Jutland: Expectation, Reality and Learning from the Experience of Battle in the Royal Navy, 1913-1939," in *Britain's War at Sea, 1914-1918: The War They Thought and the War They Fought*, ed. Greg Kennedy (London; New York: Routledge, 2016); Jon Tetsuro Sumida, "The Best Laid Plans: The Development of British Battle-Fleet Tactics, 1919-1942," *The International History Review*, Vol. 14-4 (Nov. 1992).

機を逃したとする見解には全面的に同意できると感じていた¹⁷⁵⁾。それが海軍を分裂させかねないという危機感ゆえに公表を断念したものの、その「海軍幕僚評価」の基本的見解は、当時の海軍省のジウトランド海戦に対する公式見解であったといえる。それゆえにこそ、多くの部分を削除したとはいえ「海軍幕僚評価」は海軍省公式記録である『ジウトランド海戦報告』の原型となりえたのである。

さらに「海軍幕僚評価」の影響は、海軍省の外側にも発揮された。チャーチルは『世界の危機』の執筆にあたって「海軍幕僚評価」を参考にしており、ジウトランド海戦の勝利がロシア情勢の展開にもちえた戦略的意味などに認識を広め、またジェリコーの慎重な指揮への否定的見解に同感するなど、大いにデュワーの主張に影響を受けていた¹⁷⁶⁾。ビーティーからデュワーを推薦されて、チャーチルはジウトランド海戦についてデュワーと直接に話し合っている¹⁷⁷⁾。デュワーの影響は、「海軍幕僚評価」と同じく戦艦隊の中央部先行展開の主張が『世界の危機』にあることからよく感知される¹⁷⁸⁾。『世界の危機』がジウトランド論争に与えた影響を思えば、「海軍幕僚評価」とデュワーがジウトランド論争に及ぼした影響力は大きかったといえることができる。

兄アルフレッド・デュワーが第一次世界大戦後に、『ブリタニカ百科事典 (*The Encyclopædia Britannica*)』第12版においてジウトランド海戦を

175) Memorandum by Keyes DCNS and Chatfield ACNS on the Naval Staff Appreciation, 14 Aug. 1922, in *BP*, vol. 2, p. 455.

176) Churchill to Keyes, 25 Aug. 1924, in *KP*, vol. 2, p. 104; Stephen Wentworth Roskill, *Churchill and the Admirals* (London: Collins, 1977), pp. 59-60; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 57, 114n.

177) Churchill to Keyes, 16 Sep. 1926, in *KP*, vol. 2, p. 190; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 118; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. xxvi-xxvii.

チャーチルとデュワーの関係は以後もつづき、ロイヤル・オーク事件の際にも、チャーチルはデュワーを弁護して、「デュワーのような人材を海軍は失ってはならない」と海相ブリッジマン (William Clive Bridgeman) に手紙にて抗議している。デュワーは退役後、チャーチルの歴史書著述の補助にもあたっている。Roy Jenkins, *Churchill* (London: Macmillan, 2001), p. 429; Roskill, *Churchill and the Admirals*, p. 60.

178) Churchill, *The World Crisis*, vol. 3, pt.1, pp. 148-49.

含むいくつかの海軍関係項目の執筆者となっていることも、「海軍幕僚評価」が影響をもちえた例といえるかもしれない。そこでの彼の著述は、その基調において「海軍幕僚評価」と通底しているものであった¹⁷⁹⁾。

「海軍幕僚評価」でのジェリコー批判は、先にみたように戦術面での不備と不手際により、戦略的に大きな意味をもちえた勝利を逸したとする全面的なものである。『ジュトランド海戦報告』に対してジェリコーは強く反発を示したが、大きく削除部分があるとはいえ、それが元来は「海軍幕僚評価」であることを思えば、反発の惹起は当然といえた。「海軍幕僚評価」は、軍令部長ビーティーや軍令部長補チャトフィールド（Alfred Ernle Montacute Chatfield）少将など巡洋戦艦隊出身者と、軍令部次長キース（Roger John Brownlow Keyes）中将などビーティーに近い者から成る

179) Alfred C. Dewar, 'Jutland, Battle of' and 'Naval History of the War,' *The Encyclopædia Britannica*, 12th ed., vol. 31 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1922) (hereafter cited as *EB*), pp. 660-67, and 1077.

1926年に刊行の『ブリタニカ百科事典』第13版では、前版に引き続いてアルフレッド・デュワーがいくつかの海軍関連項目を担当しながらも、「ジュトランド海戦」の項目はオールサム大佐[退役]の執筆に代わり、一転してジェリコーを評価するものとなっている。この変化は「ジェリコー」の項目についても同様で、第12版でのフィルソン・ヤング（Alexander Bell Filson Young）によるものがジェリコーに批判的な傾向を有していたのに対し、代わって第13版でオールサムが担当したものはジェリコーを評価するものである。ヤングは、巡洋戦艦ライオンに乗艦した経験を有する、ビーティーに近い関係にあったジャーナリストで、『巡洋戦艦隊とともに（*With the Battle Cruisers* [1921]）』の作者としても知られる。一方、オールサムはのちにジェリコーの伝記を執筆している。なお、「ビーティー」の項目は第12版でヤングが担当し、第13版ではビーティーに近い関係にあったアーサー・ポーレンが執筆している。また第14版[1929年]においては「ジュトランド海戦」の項目ではないもののハーバーが項目執筆者となるなど、『ブリタニカ百科事典』からはジュトランド論争が透けてみえて興味深い。Edward Altham, *Jellicoe* (London; Glasgow: Blackie & Son, 1938); idem, 'Jellicoe, John Rushworth Jellicoe' and 'Jutland, Battle of,' *EB*, 13th ed., vol. 30 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1926), pp. 602-603 and 617-28; Arthur Joseph Hungerford Pollen, 'Beatty, David Beatty,' *EB*, 13th ed., vol. 29, p. 342; Alexander Bell Filson Young, 'Beatty, David Beatty' and 'Jellicoe, John Rushworth Jellicoe,' *EB*, 12th ed., vol. 30, pp. 422-23, and vol. 31, p. 657. e.g., John Ernest Troyte Harper, 'Falkland Islands, Battle of,' *EB*, 14th ed., vol. 9 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1929), pp. 53-55.

海軍省首脳が共感できるジェリコー批判を基調とし、巡洋戦艦隊に対し無批判な特徴をも有することから、ジェリコーを評価して巡洋戦艦隊には批判的と認識されたハーバー・レコードと『海軍作戦』第3巻を是認しなかった海軍省が受け入れるに相応しいものであったといえる。逆に述べるなら、それら二つを否認した海軍省にとって、それら以上にジェリコーに冷淡かつ巡洋戦艦隊を評価するものでなければ、公式記録として受け入れられなかったのである。その認識にデュワーはよく沿い、ビーティーも「海軍幕僚評価」に満足していた。

ビーティーがどれほど「海軍幕僚評価」に愛着を示していたかは、海軍省の返却要請に強く反発して、それを手元に残していたことでもわかる。ビーティーは、「海軍幕僚評価」の廃棄を現代史に対する犯罪行為であるとし、自ら有するそれを差し出すくらいなら軍法会議にかけられようとまで述べているのである¹⁸⁰⁾。彼と交際のあったシェーン・レスリー (John Randolph Shane Leslie) によれば、ビーティーは「海軍幕僚評価」を鍵のかかった箱に保管し、限られた友人にその一部を読んで聞かせることを楽しみにしていたが、それを他人の手にゆだねることは許さなかった。レスリーは「海軍幕僚評価」を読ませてもらう機会を得たが、そのときビーティーは決して彼から目を離さなかったという¹⁸¹⁾。

1923年にビーティーは海相アメリー (Leopold Charles Maurice Stennett Amery) に対し、ジェリコーが怯んだために大海艦隊撃滅に失敗し、大戦

180) Beatty to Keyes, 10 Apr. 1932, in *KP*, vol. 2, p. 298.

ハーバーは、『ジュトランド海戦の謎 (*The Riddle of Jutland: An Authentic History* [1934]) の共著者であるラングホーン・ギブソン (Langhorne Gibson) から、彼が1932年にビーティーのもとを訪問したときに「海軍幕僚評価」を読むことを許されたと聞いた。それをどうしたら入手できるのかとギブソンに問われたハーバーは、盗むしかない (By burglary only)、と答えたという。Harper, *Facts Dealing*, Part II, Footnote, 1928, in *JP*, vol. 2, p. 482n. [この脚注は当文書の他の記述から考えて、1932年以降、1935年までに付加されたものではないかと思われる。] cf. Harper to Frewen, 23 Dec. 1944, in *BP*, vol. 2, p. 479.

181) Shane Leslie, *Long Shadow* (Wilkes-Barre, PA: Dimension Books, 1967), p. 214; Roskill, *Earl Beatty*, p. 333.

の期間を短縮できなかったと述べたという¹⁸²⁾。なぜなら大海艦隊撃滅が成れば、対独封鎖を強化し、ドイツ潜水艦による通商破壊戦を妨げ、ロシア革命勃発前にドイツを屈服させえたからだという。これは「海軍幕僚評価」で主張された艦隊決戦勝利の戦略的効果である。「海軍幕僚評価」は、ジェリコーの不手際のために海戦の勝利を逃したことが大きな戦略的影響を及ぼしたという理論的枠組をビーティーに与え、さらにジェリコー批判の思いを強めさせたのであろう。ジウトランド海戦で総旗艦アイアン・デューク艦長を務めるなどジェリコーと親しい関係にあったドレイヤー (Frederic Charles Dreyer) 大將は、なぜ軍令部長のビーティーが『ジウトランド海戦報告』を刊行してジウトランド海戦での彼の司令長官をぞんざいに扱うのか理解できないと述べているが、「海軍幕僚評価」という理論的裏付けをもってジェリコー批判の正当を確信していただろうビーティーが、ドレイヤーに満足されるようなジェリコーへの配慮を示すことはありえなかったと思われる¹⁸³⁾。

「海軍幕僚評価」におけるジェリコーとビーティーに対する対照的評価は、両者とデュワールの個人的位置関係と無縁とは思われない。デュワーは自伝において、「海軍幕僚評価」を作成するにあたって、ビーティーを含めて誰の干渉も受けておらず、ビーティーはその完成まで「海軍幕僚評価」を見ることさえなく、デュワーもビーティーに一度だけ叙述の在り方について面談したのみだと述べている¹⁸⁴⁾。しかし、「海軍幕僚評価」編者へのデュワールの選定には、おそらくビーティーの意向が影響しており、デュワーがビーティーの意に沿うように「海軍幕僚評価」を作成したとの観察は広くおこなわれていた¹⁸⁵⁾。やはり、その内容から考えても、ビーティーの影響が「海軍幕僚評価」になかったとは考えにくい。また、たと

182) L. S. Amery: *Diary*, 3 Aug. 1923, in *BP*, vol. 2, p. 463.

183) Dreyer, *Sea Heritage*, p. 185.

184) Dewar, *Navy from Within*, p. 267.

185) Beatty to Captain K. G. B. Dewar, 23 Apr. 1925, and, Lieutenant Cdr O. Frewen to Evan-Thomas, 22 Feb. 1927, and, Harper to Frewen, 23 Dec. 1944, in *BP*, vol. 2, pp. 465-66, 476, and 478; Harper, *Facts Dealing*, in *JP*, vol. 2, p. 482; Roskill, *Earl Beatty*, pp. 332-33, 349.

えデュワーの述べる通りであったとしても、「海軍幕僚評価」を作成したデュワーと、その内容を容認したビーティーのジュトランド海戦観は近似したものであり、ジュトランド論争における立ち位置はジェリコー批判という点で同じであったといえよう。

先述のように、デュワーが初めてビーティーに会ったのは、1918年3月末に大艦隊を訪れたときだったという。彼らはスカンジナビア向け護送船団の問題などにつき会話をもったが、大艦隊司令長官だったビーティーは無意識の勇気をまとった明敏な人物としてデュワーに強い好印象を与えたという¹⁸⁶⁾。実際には、それ以前の1917年夏以来、ビーティー周辺の大艦隊参謀たち、つまりチャルマース (William Scott Chalmers) 少佐およびロジャー・ベレアーズ (Roger Mowbray Bellairs) 中佐と海軍省にあるデュワーとの間には密接な協調関係が形成されていた¹⁸⁷⁾。その関係開設には、かつてのビーティーの幕僚で、もとよりデュワーと親しいドラックス大佐が介在していた。また、当時、大艦隊に所属していたリッチモンドもビーティーの信任を得ていた。人脈的にみて、明らかにデュワーはビーティーに近い位置にあったのである¹⁸⁸⁾。

リッチモンド、ベレアーズ、ドラックス、それにデュワーはともに海軍協会の設立会員であり、キースやビーティーが大戦中に海軍省改革と積極的攻勢を主張する彼ら「青年トルコ人」に共感する一方、「青年トルコ人」たちもビーティーに期待を寄せていた¹⁸⁹⁾。また、大戦中にリッチモンドやデュワーら「青年トルコ人」が行動してジェリコーの軍令部長解任に影響した改革運動にビーティーは共感し、それを容認してもいた¹⁹⁰⁾。1923年の

186) Dewar, *Navy from Within*, pp. 244-45.

187) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 88-89. チャルマースはビーティーの伝記 (*The Life and Letters of David, Earl Beatty* [1951]) の著者として知られる。

188) 「海軍幕僚評価」作成後、1922年に北米・西インド戦隊に配属されたデュワーは、戦隊司令官パケナムのもとで勤務し彼を好感しているが、パケナムはジュトランド海戦当時、ビーティーの下で第2巡洋戦艦戦隊を率い、ビーティーが大艦隊司令官に転じてからは巡洋戦艦戦隊司令官を務めた、ビーティーに近い人物であった。

189) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 61-62, 67, 77-78, 90.

190) Davison, *Challenges of Command*, pp. 223, 242; idem, "Striking a Balance," p. 46.

キース宛書簡の中で『海軍作戦』第3巻についてコーベットを批判し、彼が強い親ジェリコー・反ビーティーの偏見を有していると述べるデュワーからは、その逆の反ジェリコー・親ビーティーの姿勢が強うかがわれる¹⁹¹⁾。もとよりデュワーは、兄アルフレッドとともにビーティーの信奉者であった¹⁹²⁾。

実際、デュワーの反ジェリコーの立場は明らかで、彼の自伝には数多くのジェリコー批判が散在している。たとえば、以前にジェリコーの幕僚であった参謀課程受講者の一人が、その課程に参加するのはためにならないのでやめるようにとジェリコーから言われたとする言及は参謀組織への彼の無理解と反感を示唆し、また護送船団方式への海軍省の消極的姿勢についての叙述は、その代表者であったジェリコーへの批判に通じるものである¹⁹³⁾。先述のように、海軍省入りしたデュワーは、週間評価報告書の内容をめぐってジェリコーと摩擦を生じ、おそらくはジェリコーにも疎まれて左遷されそうになった¹⁹⁴⁾。デュワーは1918年初頭に昇進できなかったことを、それまでジェリコーの意に沿わぬ見解を呈してきたためだと感じていた¹⁹⁵⁾。また、ジェリコーは機密保持の観点から1915年に『海軍評論』を問題視し、結局、それは海軍省により一時停止へと追い込まれ、デュワーたち「青年トルコ人」の強い反発をかっていた¹⁹⁶⁾。

教育・訓練面や戦術思想面等で、これまでの海軍の有り様を批判してきたデュワーにとって、ジェリコーは、その海軍の化身といえる存在でもあった。デュワーは、ジェリコーが「23才から33才までの間、艦艇勤務はただ16か月間のみで、その軍務の大部分を、戦争遂行と関係のない技術的任務に過ごした」と指摘し、自ら批判する海軍の教育・訓練が生み出した

191) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, p. 88.

192) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 244; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp.187-88.

193) Dewar, *Navy from Within*, pp. 154, 216-21.

194) *Ibid.*, pp. 221-25.

195) *Ibid.*, p. 242.

196) Davison, *Challenges of Command*, pp. 231-32; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 37.

代表例として彼を位置付けている¹⁹⁷⁾。ジェリコーは、試験の好成績で昇進を速め、過度の中央統制を特性とした海軍において庇護者フィッシャーにより取り立てられ、大艦隊海戦要務令に具現化される形式重視の部隊指揮を経験してきたが、戦術には関心なく、装備・技術面に専心して海軍軍人としての自己形成をなしてきた。また彼は、参謀組織を嫌い、独自の思考を有する部下を信頼せず、無条件に服従する者のみを侍らせ、自らと異なる意見を具申する者には報復すらしめた。このように批判するデュワーは、ジェリコーが大艦隊司令長官、そして軍令部長には不適格だったとするのである¹⁹⁸⁾。デュワーは、自らの改革志向からも、そして実体験からもジェリコーを好ましく思えるはずがなく、明らかにジェリコーへ反感を抱いていた¹⁹⁹⁾。

一方、ジェリコーも、デュワーを好感できなかった。デュワーは、1917年5月に海軍省に出頭を命じられてジェリコーと初めて対面し、週間評価報告書の作成任務を与えられたが、彼が退出しようとした際、独自の意見を有するとのデュワーの評判についてジェリコーは触れ、その語調から、彼がそれを良くは思っていないことは明らかだったと回想している²⁰⁰⁾。デュワーは、ジェリコーが彼を望んでいたわけではなく、ある種の特殊な方法でジェリコーに押しつけられたのだと自覚していた²⁰¹⁾。実際、このデュワーの海軍省入りは、1917年5月に「青年トルコ人」グループのケンウォーシー (Joseph Montague Kenworthy) 少佐がリッチモンドの意を体して首相ロイド・ジョージと面談したことが影響してのものであり、リッチモンドやデュワー自身も首相と面談して自説を述べる機会をもってい

197) Dewar, *Navy from Within*, p. 358.

198) *Ibid.*, p. 242-43; *idem*, "Battle of Jutland," III, pp. 152-54.

デュワーは、大艦隊司令長官であったときにマハンの著作を知るまで、ジェリコーは戦争指導に関する海軍史や文献を読んだことがなかったといわれると述べている。これはリッチモンドが日記においてピーティーから聞いた話として述べている内容である。このことから、彼ら3人のジェリコーに対する認識がよくうかがわれよう。Dewar, "Battle of Jutland," III, p. 153; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 251.

199) Patterson, *Jellicoe*, p. 235.

200) Dewar, *Navy from Within*, pp. 212-13.

201) Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 64.

た²⁰²⁾。先述の海軍省作戦課第16班の設置にも、デュワーと首相との面談が影響していたかもしれない。

そうした青年将校グループと首相など政治家との接触、そして、週間評価報告書をめぐるデュワーと海相ゲッデスとのつながりも、ジェリコーにとって好ましいものとは思われなかっただろう。ジェリコーは、ロイド・ジョージなどの政治家、さらに若手将校が戦略面に干渉することを迷惑に感じていた²⁰³⁾。1917年にデュワーを東インド戦隊へ左遷しようとした動きには、そのような背景があったものと思われる²⁰⁴⁾。大戦後、そのデュワーが作成した「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版である『ジュトランド海戦報告』に接した際、ジェリコーはデュワーへの反感を新たにしたことだろう。その内容の不正確と不完全な推定に不満を示したジェリコーは、編者のデュワー兄弟にジュトランド海戦の公式記録を作成する資質があるとは思えないと批判している²⁰⁵⁾。ジェリコーは、デュワー兄弟の仕事を知識不足かつ、ずさんなものであると感じていた²⁰⁶⁾。

デュワーとジェリコーの間には隔絶があり、そのようなジェリコーを「海軍幕僚評価」において批判することに対し、自身の正しさを信じるデュワーには躊躇いはなかったであろう。そして、デュワーの批判の厳しさには彼の批判的思考傾向と、さらに自らの見解を主張したいという知的欲求も反映していたことだろう。「海軍幕僚評価」の作成は、それまで海軍について考察を深めてきたデュワーにとって、自らの主張を表現する絶好の機会であった。大戦終結後まもない時期の、まだ大戦中に感じたジェリコーへの不満や不信、ジュトランド海戦への幻滅感が生々しい状態において、デュワーは自らの主張を託して「海軍幕僚評価」を作成したので

202) Dewar, *Navy from Within*, pp. 230-32; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 63-65, 71; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 257.

203) Davison, *Challenges of Command*, pp. 235-36.

204) *Ibid.*, p. 243; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71.

205) Jellicoe to Frewen, 25 Aug. and 6 Nov. 1922, and, Jellicoe to the Secretary of the Admiralty, 27 Nov. 1922, in *JP*, vol. 2, pp. 416, 417-18, and 419-20; Roskill, *Earl Beatty*, p. 332; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 191-92.

206) Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

あった。

しかし、単縦陣批判など当時一般的な戦術思想に対する批判も強いデュワーの個人的主張が明らかであればあるほど、それは反発を招くことになった。ハーパーによれば、1922年に彼も参加していた戦争課程において、デュワーが「海軍幕僚評価」の内容を講義したところ、受講者全てに不評であり、反発をかったという²⁰⁷⁾。また、ジュトランド海戦でのジェリコーの指揮を評価する向きも強く存在していた。たとえば、ジュトランド海戦において巡洋戦艦隊の第1巡洋戦艦戦隊司令官として巡洋戦艦プリンセス・ロイヤル(HMS Princess Royal)にあったブロック大將は、1927年にドレイヤーに対し、ジュトランド海戦においてジェリコーに過失はなく、彼が直面した困難を考えれば、それは驚くべきことだと言うと述べたという²⁰⁸⁾。客観的記録を旨としたハーパー・レコードでさえ批判を受け論争的となったことを思えば、ジェリコーへの批判とデュワーの個人的主張が強く盛り込まれた「海軍幕僚評価」が大きな反発と論争を巻き起こすのは当然のことであった。

「海軍幕僚評価」をもって、デュワーはジュトランド論争における代表的登場人物の一人となったが、それは同じく「青年トルコ人」の仲間であったリッチモンドやドラックスとの身の処し方の違いを現した。リッチモンドは、当初はジュトランド海戦におけるジェリコーに批判的であった²⁰⁹⁾。しかし、リッチモンドはハーパー・レコードに対するビーティーの干渉にも批判的で、ジュトランド海戦の関係者は海戦記録の作成に関与すべきでないと思っており、1922年にはコーベットのジュトランド海戦についての見解を理解するようにもなっていた²¹⁰⁾。リッチモンドは、デュワーの歴史叙述を疑問視するコーベットの見解を共有していたといえよう。デュワーとリッチモンドは重なる面の多い同志関係にあるが、リッチモン

207) Harper, *Facts Dealing*, in *JP*, vol. 2, p. 482; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 117; Moretz, *Thinking Wisely, Planning Boldly*, p. 161.

208) Dreyer, *Sea Heritage*, p. 186.

209) Marder, *Portrait of an Admiral*, pp. 238, 247-49, 253-55, 280, 351-52, 356, 363-64.

210) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 115-16; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 361; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

ドがジウトランド論争に距離を置いて、そのこともあって次第にピーティーから離れていったことと、デュワーのジウトランド論争における行動は対照的といえる²¹¹⁾。また、大戦中は海軍省改革を望んで動いていたドラックスも、将校の自発性の欠如や過度の中央統制という海軍の性質の欠陥を指摘しつつも、ジウトランド海戦におけるジェリコーについては個人批判を控えている²¹²⁾。

リッチモンドらとは違って、「海軍幕僚評価」において付度なしのジェリコー批判を展開したことは、海軍の中でデュワーの存在を際立たせたに違いない。それには、左遷の危機さえ招いてきた、自主独立した思考をもって積極的行動をなす彼の強い個性も影響していたことだろう。そして、その個性こそが、海軍軍人としての彼の人生に影を落とし、ロイヤル・オーク事件以降の失意の展開を招く一因にもなったのであろう。

おわりに

デュワーが批判する海軍の有り様を象徴する人物がジェリコーであり、また、デュワーは海軍におけるジェリコーとの個人的関係からも彼に好意をもちえなかった。デュワーの「海軍幕僚評価」がジェリコーに対し非常に批判的となるのも当然といえるだろう。ただし、デュワーが「海軍幕僚評価」での批判を、より抑制していたとしても、「海軍幕僚評価」から批評を削除した『ジウトランド海戦報告』がジェリコーらの強い反発を受けたことを思えば、やはりジウトランド論争の激化は避けられなかっただろう。

デュワーの経歴を概観してみると、自身としては当然かつ控えめなつもりで提案をして、もしくはしようとして、それが容れられないばかりか、上官から反発やたしなめを受け、さらには左遷されそうにもなった経験を

211) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 109, 115, 129.

212) [Drax], "Jutland or Trafalgar"; Davison, *Challenges of Command*, pp. 241, 244-45; idem, "Striking a Balance," p. 51.

彼は多々有している²¹³⁾。しかし、そうした苦い経験も彼の行動に変容をもたらすことはなく、以後も彼は反感や不利益を被ること度々であった。「海軍幕僚評価」の作成も、そうした例の一つに入るであろう。たとえデュワーが上官の反感をかわないように努力しているつもりでも、やはり彼の主張は反感をかけてしまうのであった。事実の公平な評価者というよりも、むしろ検察官のそれであるようだと言われた、「海軍幕僚評価」の叙述に表れていた彼の性格や姿勢が、そこには影響していたのであろう。

デュワーが自説を強く盛り込んだ「海軍幕僚評価」を作成して、それをジュトランド海戦公式記録の原型ともなしたものは、その内容が軍令部長ビーティーの意に沿っていたためである。もとより才能ある若手を好み、「青年トルコ人」に共感的であり、ジェリコーへの反感も共有していたビーティーは、デュワーと共感・協調する関係にあり、その信任は『世界の危機』を執筆するチャーチルに助言者としてデュワーを推薦するほどであった。

それゆえにか、ビーティーが1927年に軍令部長を退いて海軍省を去ったあと、軌を一にするようにしてデュワーの運命も暗転する。新たな軍令部長マッデンはジェリコーと関係が深く、デュワーは自身がマッデンにとって好ましい人物（*persona grata*）ではないと自覚していた²¹⁴⁾。そして実際に、マッデン軍令部長時代に生じたロイヤル・オーク事件で彼の海軍軍人としての将来は閉ざされてしまったのである²¹⁵⁾。その事件処理の妥当性はともかくとして、自らの正しさを堅く信じて自説を強く主張するデュワーの性格も事件の展開に影響していたことはまちがいないまい。これまで軍令部長ジェリコーの不興をかい、また海軍大学など自ら望むところの職務に就くことを妨げてきたとも思われる彼の強い個性が、そこでも発揮され

213) Dewar, *Navy from Within*, pp. 65-66, 73-74, 125-26, 185, 207, 222-24, 257.

214) *Ibid.*, p. 307.

215) ロイヤル・オーク事件は、地中海艦隊司令長官キースの将来にも影響を与えた。ビーティーに近く、将来の軍令部長就任が予想されていたキースは、この事件によって評価を落とし、結局、軍令部長とはなれなかったのである。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 239-46; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 170-71; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 170.

たといえよう。かつてデュワーは2度の左遷の危機を免れてきたが、ピーティーの軍令部長時代が終わった今回は切り抜けることができなかった。旧式主力艦2隻の艦長を務めたあと、少将に昇進して退役となったのである。ジュトランド海戦公式記録の作成においてピーティーの意向に反したハーパーも、先んじて1927年に不本意な退役を余儀なくされていた²¹⁶⁾。ジュトランド論争での立ち位置に関係なく、それが関係者の人生に与えた影響は大きかった。

デュワーは有能な知的エリートであったが、その狷介な個性も影響して、結局、海軍という組織に上手く順応できずに50歳で退役に至った。のち中將〔退役〕に上り、戦史班ではあるが第二次世界大戦で海軍省に復帰したものの、老境に向かうデュワーには自らの波乱に満ちた海軍人生とその挫折に思うところが多かったのではないかと想像される。しかし、たとえそこに反省があったとしても、彼のジュトランド海戦についての見解には変化はなかった²¹⁷⁾。後年、デュワーは、「海軍幕僚評価」の配付・公表が中止になったのは、「その正確性が疑問とされたわけではなく、それが論争を激化させるという反対意見がなされた」ためだったと述べている²¹⁸⁾。

ピーティーからジェリコーに親しいマッデンへと軍令部長が代わるとともに親ピーティーのデュワーが退役に至ったことは、やはりジュトランド論争の構図を彷彿させるものがある。ジュトランド海戦の影は退役後もデュワーにつきまとい、落選となった1931年の総選挙では、デュワー陣営の選挙パンフレットにジュトランド海戦と1931年にインヴァーゴードンで生じた水兵のストライキ事件、いわゆるインヴァーゴードン反乱事件（Invergordon Mutiny）を関連させた表現、つまり「イギリス海軍は1916年にジュトランド海戦で以前のドイツ皇帝を打ち破り、そして1931年には

216) 拙稿「ジュトランド論争とハーパー・レコード」、104頁。

217) Dewar, "Battle of Jutland," I-III. デュワーは1959年から翌年にかけて『海軍評論』に掲載された「ジュトランド海戦」1～3において、「海軍幕僚評価」と同様の批判と主張をなしている。

218) Dewar, "Battle of Jutland," III, p. 146.

インヴァーゴードンでモンタギュー・ノーマン氏を打ち破った」との表現があったことで批判を受け、それは彼の選挙に悪影響した。ノーマン(Montagu Collet Norman)は当時のイングランド銀行総裁であり、労働党候補の海軍提督デュワーの選挙宣伝としてありうる表現とはいえ、まだインヴァーゴードン事件の記憶が鮮明なときに、その事件とジウトランド海戦を結びつけた表現は、特に海軍基地の街であるポーツマスの選挙区(Portsmouth North)で用いるには大いに不適當であった²¹⁹⁾。

結局は彼の人生に幸いしたとはみえないジウトランド海戦であるが、最後までデュワーにとっては離れがたいものであったようである。彼が1964年に84歳で亡くなったとき、未完成で残された評論遺稿の表題は「ジウトランドからシンガポールへ(Jutland to Singapore)」というものであった²²⁰⁾。ジウトランド海戦との関りが彼の人生においてどれほど大きなものであったのかが、この最後の遺稿表題からも感じられよう。

219) “Admiral Dewar’s Apology,” 30 Oct. 1931, *Times* (London), p. 14; “Propaganda in Portsmouth: A Labour Poster,” 26 Oct. 1931, *The Times* (London), p.14; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 226-27; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 208-209.

デュワーは、問題の表現がジウトランド海戦とインヴァーゴードン事件を関連付けたものではなく、また、自身はその図案に気づかず、不注意ではあったかもしれないが、その図案とは無関係だったとタイムズ紙上で弁明している。

220) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 230; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 209.

会員業績

(2020年10月～2021年9月)

小 林 泉

- 発表・講演 「小島嶼国での水産開発」、JICA セミナー：総合テーマ『水産セクターにおける小島嶼国支援に貢献する日本の経験と知恵』、FAO・JICA 共催、2021年6月23日、オンライン
- 発表・講演 「PALM 9 と日本の島嶼国援助」、JICA セミナー：総合テーマ『PALM 9 と JICA 支援』、JICA、2021年8月10日、オンライン
- 発表・講演 「太平洋島嶼をめぐる国際関係」、日本国際フォーラム研究会、2021年9月9日、オンライン
- そ の 他 (評論) 「PIF 離脱諸国と日本外交のゆくえ」、『パシフィック ウェイ』太平洋協会刊、157号 (2021年2月)、1 頁
- そ の 他 (評論) 「東京五輪と太平洋島嶼国」、『パシフィック ウェイ』太平洋協会刊、158号 (2021年8月)、1 頁

永田 雄次郎

- 講演・講座 (公開講座) 令和3年度 (2021年度) 姫路市立生涯学習大学校 講座「2 年美術鑑賞コース」、2021年8月23日「日本の仏像1」：8月30日「日本の仏像2」：9月6日「日本の仏像3」：9月13日「日本の仏像4」：9月27日「日本の仏像5」、於 姫路市立生涯学習大学校

根無 新太郎

- 論 文 (単著) 「清末の定武軍について」『政治経済史学』第653号、1～23頁、2021年5月
- 論 文 (単著) 「清朝と捻軍－同時代のフランスの記述を手掛かりに－」『政治経済史学』第657号、1～25頁、2021年9月

三 輪 信 哉

- 論 文 (単著) 「環境問題におけるニューノーマルの考え方」、『大阪学院大学通信』第51巻第11号、1261～1284頁、2021年2月
- 学会発表 「淀川下流域改良工事に関する沖野とデ・レーケの功績について」、水資源・環境学会2021年度第37回研究大会研究発表会要旨集、16～19頁、2021年8月28日 (オンライン研究発表)
- 講演・講座 「アフリカ (ケニア、タンザニア、ボツワナ) の雨水利用」、雨水市民の会：雨水市民珍道中オンライン会議、2021年2月28日15

時～17時（オンライン）

そ の 他（評論）「環境問題で、原因と結果のつながりを考えることの大切さ」、『しみんけんきゅうニュース』、（公財）千里リサイクルプラザ市民研究所、No305、6頁、2021年9月

そ の 他（研究大会実行委員長）大会テーマ：「持続可能な開発目標（SDGs）から見た流域環境保全」2021年度水資源・環境学会第37回研究大会、2021年6月19日14時～16時30分、（オンライン）

山 口 悟

講 座 「学び直し世界史」、伊丹市立生涯学習センター（ラストホール）〔公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団〕、2020年10月～2021年1月・2021年6月～9月、於 伊丹市立生涯学習センター（ラストホール）

講 座 「日英講座」、阪神シニアカレッジ（兵庫県生きがい創造協会）、2020年12月・2021年9月、於 兵庫県阪神シニアカレッジ

講 座 「学び直し世界史」、伊丹市立生涯学習センター（ラストホール）〔公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団〕、2021年7月～9月、於 伊丹市立生涯学習センター（ラストホール）

講 座 「日英同盟の成立とヨーロッパ情勢」、大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部生涯学習講座、2021年7月24日、於 大阪学院大学

大阪学院大学国際学学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学国際学学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、国際学すなわち政治、経済および文化の国際的視野における研究を通じて、日本の進展と世界との交流に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学国際学論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で、本会の趣旨に賛同する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の事業に参加し、本会の機関誌その他の刊行物の配布をうけることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選を妨げない。
1. 会長 1名
 2. 副会長 1名
 3. 庶務委員 2名
 4. 編集委員 2名
- 第8条 会長、副会長ならびに委員は会員の選出とし、総長がこれを委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。
- 第12条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金、その他の収入をもってあてる。
- 第13条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。本連合に関する規程は別に定める。
- 第14条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。
- 第15条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認を得るものとする。

附 則

1. この会則は、平成2年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成5年4月1日に改正し、施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日に改正し、施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日に改正し、施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日に改正し、施行する。
6. この会則は、2021年4月1日に改正し、施行する。

以上

CONSTITUTION OF THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION OF OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

- Article I. The name of this association shall be the International Studies Association of Osaka Gakuin University, hereinafter referred to as ISA.
- Article II. The office of ISA shall be located in the library of Osaka Gakuin University.
- Article III. The purpose of ISA is to contribute to the development of Japan and its relations with the world, through research in international studies, that is, research in politics, economics, and culture from an international perspective, in accordance with the founding principles of this university.
- Article IV. ISA shall conduct the following activities:
1. Publish a journal, *International Studies: the Journal of the International Studies Association of Osaka Gakuin University*.
 2. Hold study meetings, lectures and forums.
 3. Other activities necessary to fulfill the objectives of the organization.
- Article V. Membership in ISA is open to:
1. Full-time faculty members of Osaka Gakuin University and Osaka Gakuin University Junior College who support the objectives of ISA.
 2. Any other person who supports the objectives of ISA and is approved by the Executive Committee.
- Article VI. Members are eligible to participate in ISA activities and receive the journal and other ISA publications.
- Article VII. The officers of ISA shall be a President, a Vice President, two executive secretaries, and two editorial staff. The term of office shall be two years, and reelection to office shall be permitted.
- Article VIII. The officers shall be elected by and from the membership of ISA, and commissioned by the Chancellor of the university.
- Article IX. The President shall represent ISA and supervise its affairs. The Vice President shall assist the President. The officers shall form an Executive Committee to administer the association and plan its activities.
- Article X. The President shall summon and preside over meetings of the Executive Committee.
- Article XI. The general assembly of ISA shall be held once every academic year. The President may also call special meetings when necessary.
- Article XII. The expenses of ISA shall be met by grants from Osaka Gakuin University, donations, and other income.
- Article XIII. Liaison with other academic societies shall be maintained through the *Federation of Academic Societies of Osaka Gakuin University (Osaka Gakuin Daigaku Gakkai Rengō)*.
- Article XIV. The fiscal year shall begin on April 1 of each year, and end on March 31 of the following year.
- Article XV. This constitution may be amended by motion at a general assembly, to be approved by the Chancellor.

大阪学院大学国際学論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は国際学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格者は、原則として本学国際学学会の会員に限る。ただし、次の場合は会員でない者も役員会の議を経て掲載することがある。
 - (1) 本会会員と共同執筆の者
 - (2) 本会会員の推薦がある者
 - (3) 本学大学院博士課程の院生で、指導教員の推薦がある者
3. 原稿用紙は本学の200字詰用紙を原則として横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。また、ワードプロセッサ等による原稿の取扱も字数においてこれに準ずる。
 欧文の場合は原則としてタイプ用紙に30行で30枚とする。
4. 原稿は、
 - ア. 論説
 - イ. 研究ノート
 - ウ. 資料
 - エ. 書評
 に区分して投稿し、いずれにも必ずレジюме（英語、独語、仏語のどれかに依るもの）を付けることとする。但し、外国語で書かれた論説・研究ノートの場合は、日本語のレジюмеも可とする。
5. 論説および研究ノートについて査読を行い、掲載の可否については編集委員会が決定する。なお、出版時には原稿受理および掲載決定の日付を明記する。
6. 発行は原則として、前期と後期の2回とし、6月、12月とする。年間ページ数は450ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、それを超えて希望する場合は編集委員会で超過分の額を決める。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

大阪学院大学国際学論集執筆要領

1. 原稿は最終稿とし、校正の段階でページ替えとなる加筆や削除をしない。
2. 邦文原稿の挿入欧文は、ワードプロセッサ等に依るか、明瞭な活字体で書くかする。
3. できるだけ現代かなづかいと常用漢字を用いる。
4. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
5. 脚注はまとめて本文の末尾に置く。
インデックス番号は上つきとして片括弧〔例・・・4〕を用い、通しナンバーとする。
6. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示する。説明文は別紙にまとめる。
7. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は、厚手の台紙に貼りつけて、希望の縮尺を記入すること。
8. 執筆者校正は2校までとし、何校目かを朱筆する。2校以前で校了してもよく、その場合は責了と朱筆する。
9. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるので特に注意されたい。
ア. 校正の際、内容に大きな変更を来たさないものの、やむをえず組み換えがなされたとき
イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわったとき
10. 原稿の提出期限は原則として3月末と9月末とする。
11. 原稿の提出先は編集委員宛とする。
12. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し出て受け取る。

以上

2021年度 大阪学院大学国際学学会会員 (2021年12月31日現在)

石 川 武 敏	伊 田 行 秀	井 上 専
S. ギニャール	黒 田 泰 司	小 林 泉
N.M. シャクルトン	瀬 川 真 平	近 松 明 彦
永 田 雄次郎	根 無 新太郎	三 輪 信 哉

(50音順)

大阪学院大学国際学学会役員

会 長	根 無 喜 一	編集委員	尾 崎 庸 介
副 会 長	広 野 好 彦		山 口 悟
庶務委員	中 則 夫		
	松 本 芳 明		

執筆者紹介 (掲載順)

広 野 好 彦	(国 際 学 部 教 授)
山 口 悟	(商 学 部 教 授)

国 際 学 論 集

第32巻第1・2号

2021年12月31日 発行

発行兼編集者

大阪学院大学国際学学会

代表 根無 喜一

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 phone 06-6381-8434(代)

印 刷

大枝印刷株式会社

〒564-0031 大阪府吹田市元町28番7号 phone 06-6381-3395

INTERNATIONAL STUDIES

VOL. 32, NO.1, 2

DECEMBER 2021

Contents

Articles

- The Diaries of Maria Feodorovna (1914-1918)
..... HIRONO YOSHIHIKO — 1
- Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (2)
..... YAMAGUCHI SATORU — 43
- Publications and News of the Members** 79

**THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION
OF
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY**